平成29年4月1日
防衛大学校同窓会機関誌

小　原　台　だ　よ　り

Vol. 24
電子版第2号

CONTENTS

■ 防衛大学校（前）同窓会長からのご挨拶 3

■ ２９年度新春國分学校長に聞く 5

■ 会長ルーム・活動録

平成２８年度第３学年部隊実習激励 9

防衛大学校平成２８年度開校記念祭等参加 12

■ 防衛大学校関連

２９年度武藤副校長に聞く 16

新幹事に聞く 19

■ 同窓生は今

第 60 期生に聞く（その１） 22

第 60 期生に聞く（その２） 25

第 60 期生に聞く（その３） 28

第 60 期生に聞く（その４） 31

今人生、男盛り（２２期－その１） 34

今人生、男盛り（２２期－その２） 37

今人生、男盛り（２２期－その３） 40

今人生、男盛り（２２期－その４） 43

■ 活動報告

ホーム・カミング・デー ２（ＨＣＤ2） 46

第４０期ホーム・ビジット・デー（ＨＶＤ） 50

平成２８年度防衛大学校同窓会代議員会等（実施報告） 57

第１８期ホーム・カミング・デー(ＨＣＤ) 59

■　講話録・投稿文

新入生（６４期生）に対するOB講話　72

■　連絡事項

平成２７年度防衛大学校同窓会決算書　78

平成２８年度期生会長・代議員名簿　80

平成２８年度同窓会本部・支部役員名簿　82

■　電子版「小原台だより」の発刊にあたり　85

防衛大学校（前）同窓会長からのご挨拶

同窓会会員の皆様におかれましては、全国各地においてご健勝でご活躍のことと存じます。

今年も同窓会本部は 26 期までの有志によるスタッフで、各支部、各期生会、防衛大学校等と連携しつつ、より一層の同窓会の発展に取り組んでまいります。皆様のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

さて、昨年の開校祭には卒業後 20 年を迎えた第 40 期生(女子学生第 1 期生)がホームビジットに参加しました。懇親会では現役自衛官である彼らから職務に対する自信と意欲そして逞しさを感じとることができました。そして、本年 3 月の第 61 期生の卒業式には第 18 期生がホームカミングデーとして国分学校長から招待いただき、例年同様、多くの同窓生そしてそのご家族が参加いたします。また、4 月の第 65 期生の入校式には多くの第 5 期生がホームカミングデー2 として御招待を受け、入校後 60 年の母校を訪れることになっています。

同窓会会長として防衛大学校の行事に向かうたびに、心躍る瞬間があります。それは高速道路で馬掘海岸のトンネルを出ると、すぐ目の前に東京湾が広がる光景です。もちろん馬掘は当時に比べて市街地化されていますが、故郷や学生時代に一瞬帰ったような気持ちになるのは私だけでしょうか。一方、情緒的なことはさておいて、小原台上に上がると建物群は変容を遂げ、教育内容や校友会活動も変化しています。間もなく第 1 期生が卒業して 60 年を迎えようとしていますが、「形も内容」も時代の流れは確実に大きく進んでいるのがわかります。そのような時代の中で、学生気質も変化していくのは当然ですが、在校する学生たちと話をすると大事なことはしっかりと受け継がれていることを感じます。時代は変化しても、約 60 年の防大の歴史や伝統、そして時代に適応し

てきた防大教育の確かさや、同窓生の自衛官としての国民からの信頼や現場での活躍等が背景として活かされていることがわかります。

これからの時代は、すべての分野で地殻変動が起き、大きく変化しようとしています。防衛省・自衛隊にとっては益々厳しい安全保障環境に立ち向かわねばなりません。現役同窓生にはまさに自衛隊幹部の中核としての責務が大きくなっていきます。そのような中で、同窓会活動も母校である「防衛大学校の支援」は勿論ですが、「過去への懐かしい思い」から「将来の現役同窓生の活動を支援する」取り組みをもっと推進する時期でしょう。

防衛大学校では、国分学校長の主導で「教育、訓練、研究の将来の在り方を考える新たな高みプロジェクト」がスタートし、防大の 20 年後、30 年後を見据えた取り組みが進んでいます。その一つとして、2016 年にはグローバルセキュリティセンターが発足し、アジア安全保障、セイバーセキュリティ、宇宙安全保障そして海洋安全保障等国際社会が直面する多種多様な安全保障課題を、多角的に研究し、その研究成果を広く内外に発信することを目的とした取り組みがスタートしました。同窓会としても、防衛大学校のこれらの取り組みに対して、何らかの形でできる限りのご協力・ご支援をしていきたいと思います。

今年もなすべきことや課題が多くありますが、同窓会本部も皆様のご意見をいただきながら、真摯に取り組んでまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、会員の皆様の益々のご健勝とご活躍を祈念申し上げます。

２９年度新春國分学校長に聞く

防衛大学校長５年の経過報告

防衛大学校長　國 分 良 成

　防衛大学校長に着任してからこの３月末で５年目を終え、４月からは６年目に入ることになる。この５年、実にいろいろなことがあった。最初の２年は、学校の輪郭を知ることだけで手一杯であった。ところが２年目の途中から、保険金事案といじめ事案を中心に、学生関連の様々な案件が生起した。これらの問題に真剣に向き合うと同時に、このピンチをいかにチャンスに変えるかに腐心した。そうした中から生まれたのが「新たな高みプロジェクト」であり、昨年の『小原台だより』では、その一環であった「新学生間指導」について紹介させていただいた。

　一昨年、教養教育センターを設立した。その目的は、知的で文化的な契機を学生に与え、かつ英語能力を向上させることであった。センターの主催で、文化人、経済人、宇宙飛行士など異業種で活躍する著名人の講演会を企画し、同時に英語能力向上のための諸施策を展開してきた。英語に関しては、この数年で TOEIC の平均点を 100 点以上上げることができ、一定の成果が出ている。

また、国際交流センターを設置し、増大する留学生の受け入れと防大生の海外派遣、拡大する学生主体の国際士官候補生会議、増え続ける海外からのお客様の受け入れ等々、こうした急速な国際化の動きに対応できる体制を整備した。ただ、今では仕事量が増えすぎ、センター職員の増員が急務となっている。

　そして昨年、念願のグローバルセキュリティセンターを設置し、開所記念式典を兼ねた国際シンポジウムを開催した。このシンポでは、コロンビア大学名誉教授のジェラルド・カーティス氏を基調講演にお招きし、そ

の問題提起をもとにパネルディスカッションを行った。防大は教育中心の機関ではあるが、同時に300人を超える各分野の優秀な研究者を教官として有しており、こうした先生たちの学科を超えた共同研究が必要だとの観点から研究センターを設置した。防大側の熱い要請に防衛省も財務省も応えてくれ、平成29年度には約1.5億円という予算が真水で付くことになった。この研究センターが将来、防大の研究面における顔として存立していればと思っている。

遠泳、カッター、棒倒し、断郊、持続走などと言えば、防大の卒業生であれば今でも血が騒ぐはずである。昨年度から防大では、11種競技を設定し、年度最優秀大隊を決定することにした。11種とは、パレード、体力測定、カッター、水泳競技会、英語能力（TOEIC）、演劇祭、棒倒し、ビブリオ（書評）バトル、隊歌コンクール、断郊、持続走がそれである。ちなみに、第1回の昨年度は3大隊が年度最優秀大隊を勝ち取った。このような様々な競技会で活躍した学生たちにもメダル等が授与されるが、それらの賞品に関しては防大同窓会から多大なるご支援をいただいており、心からお礼を申し上げたい。

この5年、全国各地の自衛隊の基地や部隊を訪れ、防大卒業生たちの活躍の現場に触れるとともに、自衛隊の具体的な任務について実地研修を行ってきた。それこそ、北は知床から南は硫黄島・沖ノ鳥島、東は南鳥島から西は与那国島まで、陸・海・空の主要な基地や部隊はいうまでもなく、地方の比較的小さな自衛隊関連施設にいたるまで、かなりの数を訪問させていただいた。各地で出会った防大卒業生との会話は、学校の方向性を決めるのに大いに参考になっている。

海外の士官学校との交流拡大のため、諸外国も公式訪問させていただいた。スウェーデン、フランス、アメリカ（2回）、タイ、ベトナム、マレーシア、ポーランド、イギリス、フィリピン、東ティモールなどがこれまでの公式訪問国である。各国で防大卒業生に会うのは実に楽しいひとときであり、また防大卒業の防衛駐在官に出会うのも嬉しいひとときであった。

ここまでやや5年間の自慢話に傾いてしまったので、以下においては、防大が今後とも取り組まなければならないいくつかの重要かつ主要な課題を取り上げてみたい。

そのひとつは、少子化の中で、防大にいかに優秀な学生を迎え続けるかという点である。急激な少子化が始まるいわゆる2018年問題があり、一般大学においては学生の獲得競争が始まっている。自衛隊の任務は質量ともに拡大傾向にあるが、同時に危険な部分も拡大していく可能性がある。現段階において防大は十分な数の受験生を確保している。しかしそれが今後とも保証されるわけではない。必要なことは、絶えず入試改革を行い、また全国の高校生に広く防大の魅力を発信することである。

もうひとつの課題は女性の増員である。現在、防大の定員は480名、このうち女性は従来40人だが、まもなく60人になる。防大が女性の卒業生を輩出してから20年が経過した。もちろん一線で活躍している女性も多いが、自衛隊を退かれた方もいる。防大生には優秀な女性が多い。彼らが卒業後も自衛隊で活躍できることを祈るばかりだが、防大の学生生活においても、現状の男性中心の運営スタイルからいかに女性も躍動できる空間を作りだすか、これは大きな課題であり挑戦である。

またもうひとつの課題は、高等教育機関としての防衛大学校をいかにして普通の大学並みの地位に引き上げるかという問題である。学生時代も含めて一般大学に40年在籍した経験から言えば、防大は一般大学の数倍もすべての中身が充実している。日本一の大学だと豪語する自信もある。しかし現状では、「大学」でなければ学位を与える資格がなく、「大学校」は学位授与機構という文科省の下部機関を通じて学位が授与されるシステムである。防大は一流の教官を多く擁しているにもかかわらず、学士・修士・博士の学位を審査する権利を持っていない。「大学」にしか「大学院」は設置できず、「大学校」では「研究科」という名称が認められるだけである。日本全国、いかなるレベルの「大学院」でも修士・博士の学位を審査して授与することができ

るが、防大の教官たちはそれができない。このような、世界にも稀な現状をいかに改善するか、これは防大教官たちの学者としてのプライドにも関係する重要な課題である。

以上のような課題以外にも、学生の自由と規律のバランスをいかに図るか、教官・事務官・自衛官（陸・海・空）の間の調和をいかに作り出すか等々、様々なテーマが考えられる。加えて、さらなる防大の発展のために、今後ともいかに防大同窓会との連携強化をはかるか、これも重要なテーマである。

平成 28 年度 第 3 学年部隊実習激励

折木同窓会長は、７月１１日(月)　第１航空群(鹿児島県鹿屋市)で部隊実習中の防衛大学校第３学年海上要員を激励しました。

当日は、鹿児島地方が豪雨のため、視界不良の場合、福岡空港への着陸地変更もしくは羽田空港への引き返しという条件付フライトで鹿児島に向かいました。しかしながら、日頃の精進の賜物で、鹿児島空港に着陸でき、鹿屋への移動中も時折豪雨に会いながらも予定どおり鹿屋航空基地に到着することができました。

第１航空群司令市田将補（33 期）を表敬の後、市田群司令及び隷下指揮官と昼食を取りながら、実習の全般説明ならびに部隊の状況等について意見交換を行いました。

午後から会長が、実習中の第３学年海上要員２４名に対して激励を実施しました。

会長からは、これから本格的な実習に入る３学年に対して「素直な気持ちで部隊の実情を見つめ、先輩である各指揮官等の勤務を体感せよ！」と檄を飛ばす一方、これらの実習から卒業後に、先輩たちのようにやっていけるのかと悩む者がいるけれども、部隊は諸君を即戦力として求めているのでなく、将来自分たちを引っ張っていく指揮官として期待を持って見ているので慌てることなく実習に取り組むように諭されました。

また、自分の昭和、平成それぞれ２０年、４０年余りの自衛隊勤務を振り返り、平成２０年代からの自衛隊の組織力と現場力のすばらしさを自身が統合幕僚長時代に対応した東日本大震災での現場部隊および指揮官を例に挙げ、説明されました。

更に、現状の安全保障環境は、一層現場力を求めており、今後は、１尉、２尉が指揮する部隊レベルで、これが求められる時代となることを強調されました。

その後、学生に対して「悩んでいること、疑問に思っていることはないか」との問いかけに、学

生からは、論理的な指導の限界や学生舎生活の規制等の発言がありました。

会長は、これらの意見に対して直接的な回答はされなかったものの、統率に関する悩みは、指揮官である限り悩み続け、更なる高みを目指すものと締めくくられました。

夕刻、部隊で計画された懇親会は、部隊の同窓生はもちろん、遠方から同窓会鹿児島支部会員の方や基地支援団体からも参加を得て、盛大に行われました。来賓代表として会長が挨拶するとともに、防大同窓会鹿児島支部長岩崎様から託された支援金を学生代表に手渡しました。

部隊側の実習に対する真摯な対応をありがたくかつ嬉しく感じるとともに学生諸君がこの機会を活用し、有意義な航空・乗艦実習を送ることを期待し、鹿屋を後にしました。

ここにあらためて、第１航空群司令をはじめ、第１航空群団司令部、隷下部隊及び防衛大学校訓練課の方々のご支援・ご協力に心より感謝申し上げます。

（本部事務局　事業部　25 期海　　吉岡俊一　記）

1空群司令（市田将補（33期））表敬

群司令及び隷下指揮官と会食

会長学生激励

実習視察

実習視察

来賓代表会長挨拶

同窓会鹿児島支部支援金贈呈

防衛大学校平成２８年度開校記念祭等参加

１１月１９～２０日の２日間にわたり、折木同窓会長が防衛大学校で実施された開校記念祭等の行事に参加しました。

１９日（土）には、槇初代学校長生誕記念献花式、同窓会会食、顕彰碑献花式に参加しました。槇初代学校長生誕記念献花式では、１８９１年１２月の生誕から１２５周年に当たる今年、資料館内の槇記念室において、学校長、槇初代学校長の孫である槇 桂氏、同窓会長、学生隊学生長が献花して誕生を祝いました。

続いて陸上競技場で実施された訓練展示を見学した後、本館大会議室において同窓会会食を主催しました。國分学校長をはじめ、各幕僚長代理などの来賓を迎え、各期代表が参加して、和やかに会食を行いました。

次いで、人文科学館南側顕彰碑において、顕彰碑献花式に参列し、１００柱の御霊に哀悼の誠を捧げました。

本年度は新たに本科第３２期渡部誠君、同第３５期林和久君、同４４期高橋健一郎君、同４４期阿部慎也君が祀られ、御遺族の参列を得て厳粛に式が挙行される中、同窓会長が顕彰の辞を奉読し、御霊の安らかならんことと、御遺族の健勝を祈念しました。

２０日（日）には、記念式典・観閲式、祝賀会食、第４０期ＨＶＤに参加しました。
記念式典・観閲式では、陸上競技場において、第６１～６４期の学生による威風堂々たる姿に接するとともに、卒業生を中心とした部隊による祝賀飛行や空挺降下を観て、たいへん心強く感じました。

学生食堂で実施された祝賀会食は、部内外から多数の来賓を迎えて盛会となりました。同窓会長の万歳三唱をもってお開きとなりました。

引き続き、学生会館に移動し、第４０期生の卒業２０周年を祝うＨＶＤに参加しました。御家族を含めて歓談し、これまでの労を讃えるとともに、今後の活躍を祈念しました。

この他、防衛大学校では、テレビ等で紹介されあらためて有名になった棒倒しなど、多くの行事を行っていました。今年度の統一テーマを「飛躍」とし、あるべき姿と良き伝統を受け継ぎ、新たな一歩を大きく踏み出す開校記念祭を目指していました。

（本部事務局　総務部　26 期陸　　増田 潤一 記）

槇初代学校長生誕記念献花式で挨拶する槇 桂氏

槇初代学校長への献花

防大生による訓練展示

155 ミリ榴弾砲の空包射撃

約 70 名が参加した同窓会会食

同窓会会食での主催者挨拶

顕彰碑献花式の会場

顕彰の辞を奉読する同窓会会長

記念式典・観閲式で整列する観閲部隊

式典に花を添える同窓生による空挺降下

祝賀会での万歳三唱時の挨拶

第 40 期 HVD での逍遙歌

防衛大学校関連

２９年度武藤副校長に聞く

学生舎研修に参加して

防衛大学校副校長（企画・管理担当）

武 藤 義 哉

昨年７月１日に防衛大学校副校長（企画・管理担当）に着任して、2～3 か月もすると、各地で行われる防大生の訓練視察や校内の施設見学等を通じて防大というところの様子も少しずつ分かってきた。しかしまだ一つ謎に満ちた領域があって、それが学生舎だった。学生舎とは言うまでもなく、防大生が集団で生活する、いわば寮である。したがって、指導教官等を別とすれば、教職員は普段その中を見ることはほとんど無い。しかし、実は「学生舎研修」というとてもよい企画が年数回実施される。はっきりしたことはわからないが、1999～2000 年頃開始されたようで、簡単に言えば教職員が一晩学生舎で学生と寝食を共にし、彼ら彼女らがどのような生活を送っているかを知ろうというものである。

私にとってこれに参加する１回目の機会が 11 月初めに訪れた。初めて垣間見る世界であるので、楽しみであると同時に、少しく緊張したのも事実である。「今夜は学生舎に泊まる。」と家内に朝言ったら、「ハリー・ポッターの世界ね。」と言われ、返答に困った。スケジュールとしては、夕方の校友会活動の見学、入浴、学生食堂での夕食、清掃・日(にっ)夕(せき)点呼視察、学生との懇談、2230 就寝。翌朝は 0600 起床、0605 日(にっ)朝(ちょう)点呼・清掃視察、学生食堂での朝食、朝礼・課業行進視察といった流れである。

わずか一晩の体験ではあるが、この研修を通じて改めて感じたことは、日本広しと言えど、防大は「ここにしかない」学校だということである。個別にとらえれば、どこの大学でも部活動はあるし、学生食堂もある。学生寮のあるところもあろう。しかし、二千人の学生が同じ時間に一斉に校友会活動をし、一斉に入浴し、一斉に食事をする。そうした基本的な生活のほか、水泳競技会や棒倒しなど各種行事へむけての全校的な盛り上がりもある。そのような、同年代の若者たちの、大きなうねりのようなものの中に 4 年間身を置くということ、これはなかなか他の大学にはないことである。

そう言うと、なじみの無い人には画一的で息のつまる生活ではないかと思われるかもしれない。事務官であり防大出身ではない私自身も、防大勤務になるまでは、正直若干そういったイメージを持っていた。しかし、このときの学生舎研修において、更には今年 1 月にあった 2 回目の同研修において、夜に実施した学生との懇談では、多くの学生が、入学当初には規律の厳しさにとまどいを感じたけれども、今では防大に大いに魅力を感じている、という趣旨のことを口々に発言していた。その魅力の第一は、皆が協力していろいろなことをやっていく防大の生活の中で培われる、先輩後輩、同期、同部屋などの人間関係の濃さ、団結の強さだとのこと。現代の一般の学生生活、そして社会生活においても、もしかすると失われかけているかもしれないある種の価値が、まだここにはしっかり息づいているということであろう。

2 回目の学生舎研修では、ちょうど学生の寒稽古の時期に当たっていたので、朝 0500 に起床して、銃剣道の寒稽古を見学した。外はまだ真っ暗で、星も出ている。稽古の行

われる体育館はとても寒い。そうした中、木銃を手にきびきびと練習する学生たちの姿も印象的であったが、また、こんな早朝から学生のために指導に当たっている教官たちの献身的な関わりがあってこその防大だ、という思いをも深くしたものである。

今年秋の防大開校祭のテーマは「昇華～ここにしかないもの」に決まったが、「ここにしかないもの」をもっと一般の人に、そして防大入学に関心を持つ若者たちに、知ってもらいたいと思っている。

新幹事に聞く

「防大生よ、勇気を持て！」

防衛大学校　幹事

陸将　岸川　公彦（２８期・陸上）

全国の防衛大学校同窓会の皆さん、こんにちは。私は、昨年の夏に第４８代幹事として着任した２８期生の岸川です。自衛官としてのキャリアーをスタートしたここ小原台に今回幹事として約３０年ぶりに勤務できることを望外の喜びと感じるとともに、その役割の重さを強く認識しているところです。そして、國分良成学校長のご指導のもと、「全ては学生のために」、全身全霊を尽くす所存です。今後ともご指導をお願いいたします。

さて、今日は幹事である私が見た防衛大学校の近況について少しご紹介させて頂きます。先日（平成２８年１２月）、防衛大学校において、本年の学生隊行事を締めくくる競技会として「ビブリオバトル」が開催されました。ご承知の皆さんも多いかと思いますが、「ビブリオバトル」とは、書評合戦ともいうべきもので、読者（発表者）自らが好きな本を持ち寄って書評を展開し、最終的に参加者が最も読みたくなった本を選ぶという競技です。ここ防衛大学校においても、学生の読書意欲の高揚等を図るため、平成２５年度から行っている大隊対抗による競技会であり、今年で４回目となりました。年々そのレベルも向上しており、今年は第３大隊が優勝をいたしました。

現在防衛大学校では、従来から行われている伝統的な競技会である春の「カッター競技会」（第２学年）、秋の開校記念祭における「棒倒し競技会」、現在は年度末に行っている「断郊競技会」（第３学年）をはじめとするいわゆる体育系の競技会に加え、「ビブリオバトル競技会」や「英語能力検定（ＴＯＥＩＣ）成績」をはじめとするいわゆる知識系の競技会も行うようになり、最終的

にはこれらの結果を総合し、「年度最優秀大隊」として表彰しています。これにより従来以上に学生間での切磋琢磨を助長しつつ、知徳体のバランスのとれた資質の向上や自主自律の精神の涵養に努めているところです。

これらは、数年前より、國分良成学校長のイニシアティブの下推進している「新たな高みに向けてプロジェクト」を受けたもので、「世界一の士官学校」そして「日本一の大学」を目指して各種施策を積極的に推進しているところです。一例を挙げるとすれば、学術分野では、グローバル・セキュリティ・センター（ＧＳＣ）の開設による国際交流事業の充実を図っており、また、訓育分野では、先に述べた競技会の拡充はもとより、「新たな学生間指導のあり方」等に基づき、学生舎における慣習、心得、躾、規律、信頼、服従等についても、学生の自主自律を重んじつつ、その充実に努めているところです。

その「ビブリオバトル競技会」の表彰式において、國分学校長より、池田潔著「自由と規律」を紹介しつつ、「良書に巡り合うことの重要性」そして「防衛大学校における自由と規律」について話がありました。既に多くの皆さんも本書については、十分にご承知とは思いますが、同氏は、イギリス文学のご専門で慶應義塾大学において教鞭をとられた方で、その代表作の一つである「自由と規律」は、戦前のイギリスのパブリックスクール等で学んだ著者の経験に基づき、自由の重要性や自由を守るための規律の重要性を説いた名著と言えます。そのエッセンスは、著書の中で引用されている恩師である小泉信三先生の言葉に最もよく表れていると思います。それは、「かく厳格なる教育（イギリスのパブリックスクールの教育）が、それによって期するところは何であるか。それは正邪の観念を明らかにし、正を正とし邪を邪としてはばからぬ道徳的勇気を養ひ、各人がかかる勇気を持つところにそこに始めて真の自由の保障がある所以を教へることに在ると思ふ。」と言う言葉です。まさに小原台において我々が目指している資質教育の究極的な狙いそのものであると思います。

他方、これらの資質教育については、現在も日々学生隊や校友会活動を通じ自主自律を重視した実践陶冶により日々充実を図っていることころですが、その成果は、一朝一夕に出るものでなく、指導者（教官）等による率先垂範とそれに善導される全学生による、高い志の保持とその追求を目指した日々の弛まない努力が必要であり、未だ道半ばであり、まさに「任重く道遠し」と言わざるを得ません。

このような中、着任以来、学生の学生舎における生活さらには校友会における活動等を機会を見つけ観察してみると、ほとんどの学生諸官は、物事の良し悪しの峻別は十分認識しているものと思われます。また、自由と放縦の違いそしてその違いがそれらを裏付ける規律があるかないかによること、さらにはその規律を身につけるための修養の場がここ小原台であることなどもしっかり理解しているのです。問題は、往々にして自らが善とするところの実践に尻込みする嫌いがあるという点だと思います。

まさに今防衛大学校の学生諸官に求められているものは、小泉信三先生が述べられている「道徳的勇気」だと思います。防衛大学校の卒業生としてまた、現在学生教育に携わる者の一人として、「防大生よ、勇気を持て！」と問いかけたいと思います。さらに、このような学生を日々善導すべき我々指導者（教官）等に対しても福澤諭吉先生の言葉を引用し一言。「徳教は目より入りて耳より入らず。」読んでお分かりの通り、言葉でよい教えを耳に説いて聞かせるより、自らが実践し、目から見せることには敵わないという意味です。正に我々指導者（教官）等に学生の活模範となる率先躬行が強く求められているのです。

以上、新着任者の目から見た防衛大学校の近況について、紹介させていただきました。今後とも、國分良成学校長の下、学生そして教官等が一丸となって、明るくそして生き生きと日々取り組んでまいります。防衛大学校同窓会の皆さん、ご支援・ご協力をお願いいたします。

同窓生は今

第６０期生に聞く（その１）

題名：「目の前の事に全力を尽くす」

第３候補生隊第３区隊

幹部候補生陸曹長　岡田　健

現在、陸上自衛隊幹部候補生学校・第９７期一般幹部候補生ＢＵ過程に入校中の防衛大学校本科第６０期卒業生、岡田候補生です。

防衛大学校を卒業し、幹部候補生学校に入校し、早くもその大半が過ぎ去り、卒業まで残すところわずかとなりました。幹部候補生学校では、約１０ヶ月という短い間に、日常起居をはじめとして、小隊長としての実員指揮能力に重点を置いた戦闘・戦技訓練、戦術や戦史といった幹部として必要な識能教育、そして、自分を見つめ、同期と高めあうことができる高良山登山走、藤山武装障害走等の体育訓練を行い、その中で幹部として必要とされる資質を涵養すべく日々忙しくも充実した日々を過ごしています。

今回、「小原台だより」に寄稿するにあたり、以下の２点を記します。１点目は「目の前の事に全力を尽くす」という点、２点目は「同期を愛す」という点です。

私は、日々の生活を過ごす上で「目の前の事に全力を尽くす」事を目標に生活しています。防大を卒業したての頃の私は、幹部としての理想像をすぐに持つことはできず、目標とすべきものが見つからなかったため、とにかく与えられた事に全力でぶつかろうとしたのがきっかけでした。そうすることで、上記に述べたような訓練１つ１つに全力で取り組むことができました。「全力を尽くす姿勢」は同期に伝播します。この、同期に伝播させることのできた「熱」を生み出し伝播させることこそ、私の目標とすべき小隊長像でありました。自らが率先垂範して背中で見せることによっ

て、それを見た周りの人間を感化し、部隊を強くする。はじめはぼんやりしたものであった理想の小隊長像を、目の前の事に全力を尽くす事で、確かなものにすることができました。

幹候校の生活は、厳しく辛く、くじけそうになる時があります。そんな時に助けてくれ、励ましの言葉をくれるのは同期です。１人では成し遂げられないようなことも、同期と共に支えあって協力することで乗り越えていくことができます。同期と支えあっていく中で、偏りができてくることがあると思います。気が合う同期と気が合わない同期等様々いると思います。しかし、私は全ての同期を愛さなければいけないと考えます。最も身近な同期を愛せない人間が、国を愛して守ることはできないと考えるからです。まずは、同期を愛することからはじめ、それを拡げることによって、国を守るための愛国心や使命感といった資質につなげていかなければなりません。ここ幹候校では、その資質を涵養する環境が整っています。厳しい環境の中で、自分を犠牲にしてでも同期のために頑張ることで、その絆はより強くすることができます。また、この絆は、将来、幹部となった時に自分自身を助けてくれるはずです。

最後に、防衛大学校在学中の後輩に向けて卒業生として一言記したいと思います。それは、「損得で動く人間になるな」ということです。自分のためになるか、ならないかの判断基準で動いていては、常に全力でいることはできないし、同期のために自分を犠牲にすることなど、絶対にできません。ある物事に取り組むとき、自分が損得勘定だけで動いていないかを常に問いながら生活することが、幹部にとって必要な資質を身につけるための大切なフィルターになると考えます。これから苦しい場面に遭遇して、楽な方向に流れたくなることがあると思います。しかし、楽な方向に流れることによって、周りにどのような影響を与えるのか、同期にどのように見られるのか、といった善悪のフィルターを通すことにより、幹部になる者としての誇りをもって、これから待ち受ける困難に立ち向かっていってください。

【訓練風景】

第６０期生に聞く（その２）

題名：「信頼される指揮官」

第４候補生隊第５区隊

幹部候補生陸曹長　戸髙　陸

現在、陸上自衛隊幹部候補生学校第９７期一般幹部候補生（ＢＵ）課程に入校中の防衛大学校本科第６０期卒業生、戸髙候補生です。

私たちの入校を歓迎するかのように、桜咲き乱れる前川原の地に足を踏み入れた３月２９日から早くも８ヶ月が過ぎました。毎日、様々な失敗を繰り返しながら、怒涛のように過ぎ去る日々を同期と団結し乗り越えてきました。入校当初の候補生代表の挨拶において「これから一人では乗り越えられないような困難が待っているかもしれないが、同期と力を合わせることで乗り越えていきたい」と述べましたが、正に幹部候補生学校ではそういった困難の連続でした。各種検定、野営訓練や総合訓練等、自分ひとりでは成し遂げられないものばかりでした。しかし、同期で励まし、助け合い、時には衝突をしながら切磋琢磨し状況を打破してきました。このように幹部候補生学校においては周りを見渡せば頼りになる同期がいます。しかしながら、幹部候補生学校を卒業し部隊に幹部として着隊すればほぼ皆無といっていいほど近くに同期はいません。そんな中でも指揮官・幕僚としての任を全うするために何が必要なのか、この８ヶ月間で得た自分なりの結論を述べさせて頂きます。

陸上自衛隊は組織で任務を遂行します。ここで一番重要になってくるのは周囲からの信頼だと考えます。隊員一人ひとりが自己中心的な考えを捨てて組織の為に犠牲を払うといった精神を持って任務に当たらなければその完遂は厳しいものとなります。そういった部隊団結の核心になるのは誰か。それは、我々が幹部候補生学校卒業後に任命される幹部です。国の存亡の掛かった任務は勿論、日ごろの訓練や隊務運営等において幹部は組織がより精強化するように優れた統率を発揮して

いかなければなりません。統率とは指揮・管理・統御からなり指揮官に必要な能力です。統率の中で最も難しく重要なものは統御だと私は考えます。指揮・管理を確実に行って部隊を効率的且つ機能的に運用することは実力を行使して国を守る組織として必須であると考えます。しかし、部隊は物ではありません。隊員一人ひとりを掌握し、信頼される指揮官でなければ隊員はついてこないと考えます。良好な統御がなければ、平時においては教育訓練を行っても十分な成果を得られず、日常の業務においても支障をきたす可能性を拭えません。ましてや有事の際には自分の命が掛かっている状況です。日頃から信頼関係を構築していないと指揮官に自分の命を託して命令に従うことは難しいと考えます。１１月７日から１２月７日の間、各候補生は全国各地の駐屯地において普通科隊付教育を受けました。その中で様々な幹部を見聞きしました。部下がどのような状況にあるかよく掌握もせずに自分勝手な命令を出す幹部。指揮官として最も重要な企図の明示をしない幹部。こういった部下の信頼をあまり得られていない幹部もいる一方、自分の理想とする幹部像を体現されている方々も多くいました。幹部として自分を犠牲にして仕事をする中においても、体力向上に余念がなく、人一倍努力をしていました。そんな姿をおくびにも出さず勿論、愚痴も零しませんでした。こういった姿を隊員はしっかり見ており、隊員の方々と一緒に食事をした際にはその方に対する信頼や尊敬の声を多く耳にしました。

　幹部はやはり、自分のことを犠牲にして隊員、部隊の事を考えられる人でなければならないと私は考えます。そのためには今後、幹部とは部隊でどうあるべきなのかを教育訓練の中で常に考えながら体現していく必要があります。幹部候補生学校での生活は残り２ヶ月と短いですが、指導部の指導を真摯に受け止めるとともに、同期と切磋琢磨しあい、理想の幹部像に少しでも近づけるように精進していくことを決意して結びとさせて頂きます。

【訓練風景】

第６０期生に聞く（その３）

題名： 部隊での活躍を前に、新進気鋭の候補生の意気込み

第１学生隊第１分隊

幹部候補生海曹長　　山本　玲

防大６０期卒業式、４年間の思い出が詰まった帽子を投げ上げ、母なる小原台の地を後にしてから半年が過ぎました。江田島の海上自衛隊幹部候補生学校（以下　海候校）に着任後、短艇競技、８マイル遠泳、野外戦闘訓練等の行事を終え、１１月には日本三景宮島にある世界遺産の弥山を駆け上がる弥山登山競技が待っています。帝国海軍から続く伝統あるここ江田島の地で、我々防大６０期生は、幹部自衛官として求められる必要な知識や技能、精神力の習得のため、勉学に励み日々鍛錬を続けております。生活も当然のことながら海上自衛隊式であるため、陸上自衛隊をベースとしていた防大の生活が懐かしく思われることもあります。

ここ海候校には防大や一般大を卒業した一般幹部候補生課程の他、部内の海曹から試験により選抜された部内課程、航空学生として入隊し部隊経験を経て入校した飛行幹部候補生課程、特殊分野での専門技能を以て採用される公募幹部課程、防衛医科大学等出身の医科歯科課程、そして部隊の中核として活躍している海曹長から選抜される幹部予定者課程と様々な経験を持つ自衛官が起居を共にしています。また、各課程が同じ環境で教育を受けるというのも海候校の特色の一つです。年齢や経験は異なりますが、海候校では同期として見なされ、お互いに協力することが求められます。特に、幹部予定者課程の諸先輩が息子のような年齢の私たちと変わらぬ教務や訓練を受け、自己の限界に挑戦している姿を目の当たりにし、若い私たちも負けていられないと奮起しております。当初、経験豊富な先輩自衛官にどのように接するべきか戸惑いましたが、同じ難題に取り組み助け合うことで気持ちが通じ合い、同じ自衛官としてフィールドに立てた気がします。部隊で再会

した時には、成長した私たちを見てもらいたいと切に思います。

現在の国際情勢を鑑みますと、我々海上自衛隊幹部候補生は部隊配属と同時に実任務に就くという状況が容易に想像できます。昨今、北朝鮮の弾道ミサイルの開発が急速に進み、発射実験も頻繁に繰り返されています。また、東シナ海における中国艦船とのにらみ合いは緊張の一途をたどっています。さらに、日本国内でも安保法制が改正され、自衛隊の活躍の場も広くなることが予想されます。このような国内外の情勢を踏まえると、求められる若手幹部自衛官像が自ずと見えてきます。日本国の独立と平和・安全を守るための一員として、国内法や国際法等の知識は必須条件です。また、苛酷な状況に置かれても冷静で正しい情勢判断を迅速に行うための判断力・決断力の会得も必要とされます。海候校では多くの規律と時間的制限の中での行動が求められていますが、それらの行為一つ一つに当然意味があります。我々はその意味を確認しながら、一年間修養に励み知識技能を習得し、部隊配属になると同時に、多くの部下の命を預かる幹部自衛官として独り立ちしなければなりません。任務に対する不安や重圧も感じますが、自己の役割を確実に全うできるよう、ここ江田島で日々精進しています。

最後に防大在学中の話をさせていただきますと、マスコミを賑わせる事案が生起し、今までの防大の伝統や慣習の見直しを行いました。今日まで当然のように行われていた学生間指導要領を見つめなおし、さらに進歩した防大を築き上げることを目的としたもので、指導教官、職員の方々、学生が一丸となり「一歩先へ」を学生隊年間方針とし、防大の着実な一歩前進を目指しました。悩み考え、答えを導く過程の中で、一人では答えを導くことができなかったと思う案件も数多くありました。皆が同じ方向へベクトルを向け、伝統ある防衛大学校を良くしようという気持ちで精一杯頑張ることで乗り越えることができました。海上自衛隊の一員としても、若い私たちだから持ち得るエネルギーを最大限発揮できればと思っています。

防大生の皆さんへ

　現在、防大は学生間指導をはじめとして改革の時に立っていると思います。この改革の時を楽しんでください。改革することは非常にリスクの伴う挑戦的なことではありますが、失敗のリスクを考えずに果敢に挑戦できるのは防大在学中しかありません。防大で体得した実行力は将来大きな力になると実感しています。多くの偉大な先輩方が卒業された防大をしっかりと支えてください。

　また、人の繋がりを大切にしてください。防大の同期、先輩後輩の関係は今後もずっと続く強いものだと思います。そのような絆は将来、難題に突き当たったときに、それを解決する大きな力を与えてくれるものと強く信じるからです。

　これからも身体に気を付け、勉学、訓練、校友会に励んでください。また、部隊で会えるのを楽しみにしています。

【短艇競技】

【弥山登山競技】

【野外戦闘訓練】

第６０期生に聞く（その４）

題名：「幹部ぶらず幹部らしく」

航空自衛隊幹部候補生学校学生隊第１中隊第２区隊

第 106 期一般幹部候補生防大課程

空曹長　　小田原　啄

全国の諸先輩方、同期生及び同期生の諸官におかれましては、日々の任務にご活躍のこととお慶び申し上げます。航空自衛隊幹部候補生学校第 106 期一般幹部候補生防大課程に入校中の防衛大学校本科第 60 期卒業生を代表して、小田原候補生がご挨拶を申し上げます。

防衛大学校を卒業し、一息つく間もなく幹部候補生学校の卒業も迎えようとしています。「自ら考え、判断し、行動する航空士官」を教育理念に掲げ、入校当初より区隊長、助教および基幹隊員の方々から熱意のこもったご指導を受け、日々の自分を顧みながら生活しています。また、本校防大課程の期間は、約半年と決して長くはないことが特徴として存在します。学校長の「何のためにやるのかを常に考えよ」という言葉を実践することで、一日一日を無駄なく過ごし、課程期間の短さを補完すると共に「自ら考える力」を醸成し、各部隊に配属された後に航空自衛隊の即戦力となれるように尽力しています。また、このように高い理想を抱いて課程期間に臨めるのは、区隊長、助教及び基幹隊員の方々全てのご支援があってのことだと実感しており、感謝の念を忘れることなく、このご恩を仇で返すことがないようにと心掛けています。

今回「小原台だより」へ寄稿するにあたり、以下の２点を述べさせていただきます。１点目は、「幹部候補生学校で学び感じたこと及び部隊で勤務するにあたりその意気込み」であり、２点目は「防衛大学校在学中の後輩諸官への一言」です。

まず、幹部候補生学校で学び感じたこと及び部隊で勤務するにあたりその意気込みについてで

す。幹部候補生学校では常に指揮官としての行動を求められます。その中で学び感じたことは、幹部として部下隊員の前に立つということは一筋縄ではないということでした。しかしながら、本場の部隊を経験してきた区隊長や助教の一言一言から指揮官としての行動を学び、その理想と自分の現状を照らし合わせることで、まだまだ足りないと貪欲に成長し続けることができるのが本校であります。同期と切磋琢磨し指揮官としてどうあるべきか、何をするべきかを学ぶことができます。１人では決して乗り越えることができない壁を、同期と助け合い、支え合うからこそ頑張れているのだと実感するとともに、同期の大切さを身をもって感じています。我々は卒業と同時に部隊で勤務することとなりますが、部隊では初級幹部として、幹部ぶらず幹部らしくをモットーに、自らにできることを精一杯やりきれるように、卒業までに本校で学べることをすべて吸収していきたいと思います。

次に、防衛大学校在学中の後輩諸官への一言です。防衛大学校の変革の時期に防衛大学校に在学する諸官でありますが、全てにおいて受け身になっていないでしょうか。考えることを放棄して変革の時代に流されていてはいけません。どのような状況においても考え続けましょう。そして変革の時代に自らの考えをもとに行動し、新しい防衛大学校を築き上げていってください。現状を変えられるのは考えることを放棄せず、行動をし続けた組織でありそういった組織は精強で在り続けます。防衛大学校を変革の中においても精強な組織として維持させるために、後輩諸官においてはまず考えましょう。そして、どんどん行動しましょう。どんな些細なことでもかまいません。間違ったとしてもかまいません。学生舎運営、校友会、勉学どのようなことでも考え、行動する癖を身に付けておきましょう。それはきっと、これからの自衛隊人生において自らを形成する土台となると断言します。一足先に部隊に行きますが、60 期一同後輩諸官と共に自衛隊の戦力となれる日を夢見ています。互いにまた出会う時に恥ずかしくないように、今自らが為すべきことにひたすらに取り組み、高みを目指していきましょう。

60km 徒歩更新訓練

体力測定（３ｋm走）

討論発表

沖縄研修（嘉手納基地）

総合訓練（基地警備）

今人生、男盛り（22 期ーその１）

石上布都魂神社宮司として

空２２期生　物部明徳

【平成29年正月の神職姿】

《はじめに》

　深い社叢（しゃそう）の中に身を置いて神と人との「仲とり持ち」として奉仕していますと、航空自衛隊とは異なる充実感と　　同種の充実感とを日々感じています。現在、石上布都魂神社の宮司として地域の伝統、文化の継承に微力を捧げています。今回、貴重な機会を頂きましたので、元自衛官の神職の活動を紹介させていただきます。

　当神社の由緒は、日本書紀に「素盞嗚命が八股の大蛇を退治した時に使用した剣が祀られている」と記載されています。従いまして創建は二千年以上前と考えられます。また、式内社かつ一宮であり、最近では朱印を求めて多くの方が参拝されるようになりました。既に防衛大学校同窓の方々の参拝があり、現役時代の話題に盛り上がります。

《定年後の活動》

　定年を迎えるとすぐに神職の道に入りました。私の実家が代々宮司を務めていることもあり、地元岡山の神社界に温かく迎え入れていただきました。神職の多くは、自衛隊に対し好意的に興味を持っています。神職の講習等で防衛に関する講演を依頼され、基地見学の調整も依頼され、その都度、自衛隊の広報官の気持ちで可能な限りより深く自衛隊を認識してもらおうと努力しました。神社界以外の経済団体、ロータリークラブ等からも講演依頼があり、交流の輪も広がりました。これも自衛隊勤務の御蔭と感謝しています。

　当神社が所在する地域は自然に恵まれ環境の良いところですが、文化・教養という点では都市部に遥かに及びません。何か地元の人々に貢献できることはないか、著名人を招聘して講演などを企

画できないかと考えていたところ、平成２７年に航空自衛隊ＯＢであり防衛大学校同窓である油井亀美也宇宙飛行士が宇宙ステーションに滞在するということが報道されました。早速、地元赤磐市の行政、議会の要職に油井宇宙飛行士を招聘して講演会を開催してはどうかというアイデアを打診したところ、赤磐市から積極的に講演会を企画したいという回答がありました。それからは、ボランティア・アドバイザーとして側面から支援し、平成２８年７月念願の「油井亀美也宇宙飛行士講演会」が実現しました。多くの市民が喜んで講演会に参加し、子供たちが会場の前列を陣取って目を輝かせながら油井宇宙飛行士に質問し、握手する状況を見て、裏方として久しぶりに浸った満足感でした。この事業には、いくつかの幸運がありました。最も大きかったのは防衛医科大学校第１期生で航空自衛隊ＯＢでもある緒方克彦さんが宇宙航空研究開発機構の有人宇宙ミッション本部総括医長に在職され、様々な助言を頂いたことでした。現役時代から同期会を組織していたことの御蔭と同期諸兄に改めて感謝申し上げます。

《神道・宗教（祈り）について》

神社の宮司となって改めて感じることは、神社の氏子組織が、大災害等の非常時に極めて有効な組織であるということです。東日本大震災でも神社が地域住民の核となって救護がなされた地域が多いと聞いています。それぞれの地域の自主防災組織と言えるかもしれません。ご承知のように氏子組織は、常に地域の住民で組織化され、年に数回神輿や獅子舞を伴う祭が行われます。江戸時代の武家社会でも行われていたことは、謀反の疑念を持たれないように戦の訓練を行っていたようにも考えられます。「けんか祭」などはその典型かも知れません。今後の日本社会においても氏子組織は有益であり、微力ながら氏子組織の充実、強化に努力したいと考えています。

日本人は、戦後教育の影響で諸外国に比べ宗教（祈り）に縁遠くなっています。一方、諸外国では依然として宗教（祈り）の役割は重く、海外での活動が増しつつある自衛隊は宗教（祈り）に関わる行動を避けられないのではないでしょうか。多くの国の軍隊に宗教者が同行するように、自衛隊にも同種の人材の帯同が必要となるでしょう。

短い神職勤務ですが、「祈り」は人々が人類の知識・理論で整理できない領域に接するときに行うように思えます。例えば、病気になり余命を宣告された時、極めて重大な試験・試合・仕事に臨む時、子供を授かりたい時などが挙げられます。

千年以上前に疫病で大量の死者が出た後には、「祇園祭」「祇園様」の神事が行われるようになりました。９月の台風シーズンには、「荒神様」の神事が行われています。医学や気象学の未熟な時代には、その理屈を知らずただ神に「祈る」という行為が行われました。

最近では、ＪＡＸＡの小惑星探査機「はやぶさ」帰還の際に、その責任者が無事の帰還を祈って岡山県北部の「中和神社」に参拝されたそうです。かく言う私も平成２１年４月に高射部隊指揮官として自衛隊初の弾道ミサイル対処の任にあった時には、人知れず心の中で祈りました。

将来、自衛隊が宗教者を任務遂行に必要とする時にはお役にたてることがあると思っています。私が承知しているだけでも自衛隊ＯＢの神職は複数人います。宗教を超えて自衛隊ＯＢの宗教者を探せば、更に増加するでしょう。そろそろ自衛隊ＯＢの宗教関係者ネットワークを作り、現役の皆さんの支援態勢を整えなければならないと考えています。

自衛隊退職から約３０年間を神職奉職と想定し、年甲斐もなく世のため人のために仕事を探しては自分を追い込んでいます。皆様のご健勝を祈念申し上げます。

【油井亀美也宇宙飛行士講演の際、花束贈呈を行う物部氏】

今人生、男盛り（22 期ーその 2）

東京都危機管理監を体験して

第２２期生　宮嵜　泰樹

４年前、陸上自衛隊を退官して、東京都危機管理監という東京都の現職の業務を３年間近く実施しました。この間にこれまでの自衛官の職務とはかなり異なった体験をしましたので、皆さんにその一端を紹介します。

任期中には、石原知事、猪瀬知事、舛添知事の３人の知事に仕えました。３人の知事は皆さんよくご存知のようにそれぞれ個性の強い知事ではありましたが、３人とも危機管理という分野においては、業務全般を任せていただきました。

私に最も期待された業務は、「首都直下地震対応」でした。現役最後の大仕事が、東日本大震災の災害派遣でしたので、その時のさまざまな経験や教訓を「首都直下地震対応」に盛り込もうと思いましたが、初めはなかなかうまく進みませんでした。

私が来る前までは、東京都では自衛隊の災害派遣が１５年間なかったそうですが、私の任期中には、「伊豆大島土砂災害」「三宅島山林火災」「奥多摩地区雪害」「奥多摩地区山林火災」の４件の自衛隊災害派遣があり、特に多数の犠牲者が出た「伊豆大島土砂災害」対処は、東京都に大きな衝撃を与え、これ以降都庁の災害オペレーションへの取り組む姿勢が変化し、具体的な首都直下地震対応が進み始めました。

その中で、特に印象に残ったのは次の３点でした。

１　被害想定に基づく防災計画の作成

2　都と国と区市町村の連携の難しさ

3　都と自衛隊、警察、消防との調整

先ずは「被害想定に基づく防災計画の作成」についてでありますが、我々自衛官にとっては、被害想定を基準に防災計画を作ることは自明の理ではありますが、都庁のような役所ではそのような感覚は乏しく、そもそも地図を広げて災害計画を作成する習慣がありませんでした。知事に対し地図を広げ、被害想定を展開して、その後に対応を説明すると、その説明要領に一同が驚いたことに驚きました。作戦（オペレーション）を実施する上で、地図を活用し、地形と被害と対処要領を一体的に考察することは自衛官にとっては当たり前のことですが、都庁では欠如している感覚でした。このようにして都庁の皆さんと地図や被害想定を駆使して防災計画を詰めることができたことは、重要な一歩であったと思います。

次いで、「都と国と区市町村との連携の難しさ」ですが、防災対処の一般手順は、先ず区市町村が対応、次いで都道府県が支援、最後に国が支援するという法体系で動きます。伊豆大島土砂災害では、発災当初大島町は茫然自失状態、国は早い段階から内閣府が調査団を大島に派遣して介入開始、このような中で町と都と国の３者が緊密な連携を実施して災害対処する難しさを肌で体験しました。この時の経験から、首都直下地震対応は、計画の段階から先ず都と国がしっかりと連携する必要があるとの認識を持ち、国に対して都のオペレーション計画を説明し、国の計画とすり合わせ、互いの連携要領を話し合い、互いのパイプを徐々に太くしていきました。その結果、首都直下地震発災時には、国の指揮所を都庁内に設置し、情報共有要領や各種マニュアルを共に整備し、これを検証する訓練の機会も設け、具体的な連携が進みました。他方、区市町村との連携強化も国と同様にさまざまな機会を活用して進めましたが、その数は特別区だけでも２３単位あり、これに市町村を加えるとかなりの数になります。また、それぞれの地域の特徴が異なり、首長の考え方も千差万別であるので、改めて区市町村と連携する難しさを痛感しました。

最後は、「都と自衛隊、警察、消防との調整」ですが、大島町災害時に実際に生起した事項です

が、基本的には大島町や東京都が現場において自衛隊、警察、消防の役割、活動範囲、支援協力等を調整しなければなりませんが、それは一般の行政職員にはかなりハードルが高い事項であり、実際には３者が現場で話し合って行動していました。以後、都庁の職員の皆さんに調整要領を教育しましたが、これは簡単なことではありませんでした。自衛隊では、各種組織等との調整は当たり前ですが、実はこれは大変なノウハウであり、また混乱した現場でこの種の調整を済々と実施できる自衛官の能力は、日々の訓練の積み重ねの賜物であり、防災やその他の危機管理の場において自衛官が最も力を発揮できる分野の１つであるということに改めて気づきました。

以上の３点は私の３年間の経験から特に感じたものですが、基本的に自衛隊時代に身につけた「情報」「作戦」「兵站」の各種能力は、防災等ですべて活用できるものでありました。

現在全国各地で、現役の自衛官の皆さんや自衛隊 OB の皆さんが防災関係で活躍されており、本当に心強い限りでありますが、これまで自衛隊で身につけられた各種のノウハウ、知識、技術等は、役所等にとってはすべてが宝物ですので、どうか存分に皆さんの力を発揮され、引き続き地域や地域住民のための貢献を宜しくお願い申し上げます。

今人生、男盛り（22 期ーその 3）

防大入校の動機を胸に

海２２期　早野　禎祐

　防衛大学校同窓会の皆様におかれましては、それぞれの道でご活躍されていることに敬意を表します。私は海上自衛隊を退官して間もなく６年を迎えようとしています。現在、安全保障・防衛関連のコンサル会社を設立して代表取締役として活動しております。まだまだ小さな会社ではありますが、海外で行われる防衛装備展示会等に参加して、その報告書等で自衛隊現役の皆さんを支援するとともに、高度な技術と製品等を持つ海外企業を中心にそれらのビジネスアドバイスを行っています。退官後、そこに至る経緯と現在の活動内容等について紹介したいと思います。

　退官当初は、経験の長いＩＴやネットワーク企業で米軍の退官者と同様に積極的に働きたいと考え、シスコシステムズ合同会社（ネットワークのルーターやスイッチ等の世界最大企業の日本法人）で事業開発部長（安全保障担当）として働き始めました。しかしながら、２年を過ぎた頃から同社の技術や製品だけでは自衛隊への貢献には不十分なことを認識し始めました。また売上増大を求める上司の役員との関係がギクシャクし、防衛分野からの配置換えの打診を受けたことにより退職を考え始めました。自衛隊退官後から妻と二人で海外旅行に行くようになっていましたが、この年の夏旅行はウィーンとプラハを周遊するものでした。実は、私が防大に入るきっかけを作ったのはプラハでした。１９６８年、プラハの街をワルシャワ条約機構軍の戦車が充満しプラハの春の終焉を告げるニュース映像を見て、自国の意思決定に他国から軍事力による強要を受けたくないと思い、当時の中学校の担任教師に相談して防大に入る決心をし、そのための高校選択も行いました。

その人生の進路を決めた現地に自ら立ってみて、「防衛から離れるのは止めよう。」と再度決断をしました。

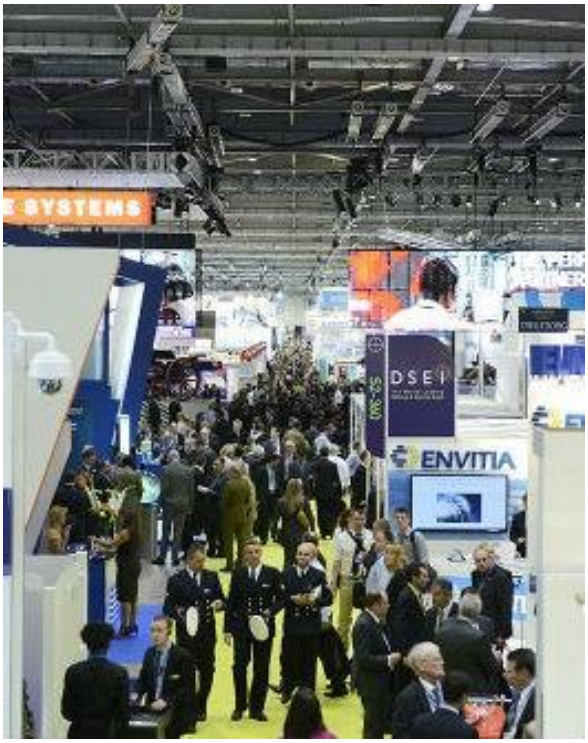
帰国後、大先輩の元将官に相談し、軍事ビジネスコンサルタントとして独立するよう背中を押されると同時に会社設立後に最初の顧客候補となる会社もご紹介いただきました。お陰様で会社設立と同時に最初の契約を頂きました。最小限の経済的な基盤ができたことで、会社設立目的である安全保障に貢献する支援と高度技術を自衛隊に導入する支援（ビジネス）を推進することができるようになりました。また、米海軍の退役将官からは高度な技術を持つ会社やユニークな製品を持つ会社をご紹介いただきました。私がサイバーセキュリティ等に関する国際資格を保有していることから、ご関係の方々の推薦により防衛省の某サイバーセキュリティに関する協議会の有識者委員も拝命させていただきました。これらのことが会社の国際的な信用力を高めてくれました。

会社設立後は軍事ビジネスコンサルタントとしての知識習得を目的として、ＡＦＣＥＡ（米軍通信電子協会）主催の会議と展示会を中心に海外イベントに参加するようになりました。初年度は、米国のオーガスタ及びハワイの展示会に参加して、その報告書を作成して各幕や部隊に配布すると共に、収集してきたユニークな技術等を紹介する活動を始めました。実際に枢要な米軍の関係者の講演やディスカッションを聞き、多くの関連企業が展示している内容を見ると、目を開かせられるものがありました。多くの参加者との会話や展示会のブースで質問をしたりすることにより、日本ではまだ実現していない高度な技術やデュアルユース技術が軍の要求により装備化されている現実を認識することができました。これらの報告に対する自衛隊現役の皆さんの好反応を得て、会社の設立理念は間違いないことを確信するに至っています。また自らが展示会に参加して報告するだけでなく、高度な技術を持つ海外企業の日本での事業展開の支援を行い、当該企業の技術者やＣＥＯ等に来日してもらって、自衛隊や国内企業での説明会を行う企画や実施活動を行っています。

海外出張は昨年が計７回、今年も米国・英国・シンガポール等計７回程度を計画しています。毎年同じ展示会に参加していますと、同様に参加している世界各国の企業の方々とも親しくなり、そ

こから新たな事業展開ができるようになりました。展示内容や会話で米軍や欧州各国の軍の方向性も見えてきます。何と言ってもビジネス界を含めた世界の軍関係者と会話して新たな知識を吸収できることは、私にとって楽しみでもあります。さらに自衛隊現役の皆さんが、既存の国内企業からは得られない世界の軍事技術や装備品等の生の情報を喜んで受け取って頂けることにやりがいを感じております。

今後も私が防大へ入る動機となった想いを胸に、自衛隊が人・モノ・金に制限を受けている環境でも「戦いに勝つ」ための装備品やシステムを得ることができるように、海外の軍の装備動向や高度な技術等の紹介を通じた支援活動を続けていきたいと思っております。



今人生、男盛り（22 期ーその 4）

人生の地平を歩く

第 22 期 陸 上

光 永 邦 保(みつなが くにやす)

《1「航海で大切なことは目的地よりも自分の位置を把握すること」》

これは、かつて古庄幸一元海上幕僚長(13 期)が母校の大分県立竹田高校を訪ねて、講話の中で使われた言葉である。

進路に悩む高校生に向かって伝えられたメッセージながら、私自身大変強く心を打たれた。以来、大きな夢や目標を描くよりも、まず今の自分の置かれた立場や状態をしっかり見極めることが、その後の方向を決める上で大切なことではないかと思うようになった。

《2　自衛隊勤務で得たもの（昭和 53 年 3 月～平成 22 年 12 月）》

防大を卒業後、同期集団とともに久留米の陸上自衛隊幹部候補生学校に移動し、約 34 年間にわたり陸上自衛官として勤務した。この間、北海道、関東、九州と全国各地をまわりながら、野戦特科職種(砲兵)の部隊長や行政的な責任者など、貴重な経験をすることができた。しかし、その経歴は自ら作り上げたものではない。組織要求の中で、常に新たな任務が与えられ、それにひるまず、ひたすら遂行することによって得られた経験と自信が一番の収穫であったように思う。

《3「国の防衛」からふるさと熊本のために（平成 23 年 2 月～）》

有り難いことに自衛官締めくくりの場として郷里熊本での勤務の機会を与えていただいた。退官後の進路は、ＯＢとしてそれなりの処遇が保障される道もご紹介いただいたが、私には「故郷の魅力を発信できるような仕事に就きたい」という思いの方が強かった。

当時、熊本は九州新幹線の開通を目前に控え、お城を中心に大きな観光プロジェクトが動いてい

た。その目玉のひとつが、「湧々座(わくわくざ)」と呼ばれる新感覚の歴史文化体験施設である。まさに観光振興の新たな担い手として市民が注目する中、私は運良くここの運営グループ長として採用していただいた。「長」とは言え、一年毎の契約社員で、その処遇は中堅幹部時代の半分にも及ばなかった。しかしそれでも、新規プロジェクトの一部を任されることへの例えようのない高揚感と興奮があった。私は、若者中心の 20 名あまりのスタッフと共に、懸命に準備に取り組んだ。

ところが、オープン直後の平成 23 年 3 月 11 日。未曾有の天災、東日本大震災が発生した。当然のことながら、公式行事と集客のためのイベントの全てが中止となった。もともとの見積が甘かったことに加え、このスタートダッシュのつまづきが響いて、入館者数は目標を大きく下回った。しかし、こうした結果がむしろ闘志をかきたてた。まずチラシや呼び込みに工夫をこらし、海外対応を強化した。英語と韓国語は陸自の特技能力で十分だった。熊本城の魅力を紹介する寸劇の脚本も自ら手掛けた。気が付いてみれば自衛隊時代に身に付けたこと全てが役に立っていた。

そして少しずつではあるが入館者の数字も上方に回復していった。

《4　地方政治の担い手として（平成 27 年 4 月～）》

観光施策の充実を図る一方で、熊本市は周辺自治体との合併事業が功を奏し、平成 24 年 4 月 1 日に政令指定都市へと移行した。これにともない市議会議員を選出する選挙の仕組みも変わり、これまでひとつであった選挙区が五つに分割されることとなった。

中でも最大の有権者数を有する東区には、健軍駐屯地が含まれていたが、当時の市議会議員の中には自衛隊の任務を全うした議員の姿はなかった。突然とも言えるこの区割り制度の変更が「いつかＯＢを市政の場に送り込みたい」という思いに千載一遇のチャンスをもたらしたのである。

私は周囲の勧めもあり立候補する決断をした。無論、理由は自衛隊のためだけではない。湧々座

において観光行政に深く関わり、市への期待感が否応なしに増大していたことも大きかった。

その後の素人丸出しの選挙の様子はとてもここに披露することはできないが、周囲の方々の温かいご支援により何とか初当選を果たすことができた。健軍駐屯地の歴史から見れば実に 16 年ぶりのことだった。

《5　そして迎えた熊本地震（平成 28 年 4 月）》

右も左もわからない議員活動に身を投じ、先輩議員からアドバイスをいただきながら迎えた二年目の平成 28 年 4 月 14 日夜と 16 日未明、今度は熊本が巨大な地震に襲われた。夜中に着の身着のままで避難する人たちに声をかけながら「ついに自らが被災者になってしまった」という強い衝撃があった。しかしそれ以上に、一人の地方議員として何ができるのか、何をしなければならないのか、というせき立てられるような思いの方が強かった。ある自治会長から要請を受け、健軍駐屯地に直接、給水を依頼した。わずか 2 時間ほどで現れた自衛隊の給水車の姿には、思わず手を合わせたくなるような神々しさがあった。また炊き出しのためにたくさんの食材を提供してくれたのは、健軍駐屯地業務隊時代にお付き合いをしていた鹿児島県の業者の方だった。更に全国から次々と駆け付けてくれた自衛隊ＯＢの防災担当者たちからは、多くの支援物資や復旧への助言をいただいた。初めての体験ばかりだったが、大きな力に支えられ、その中で判断実行することに不思議と迷いはなかった。

《6　これからのこと（平成 29 年 1 月～）》

今年で 62 歳。退官から 6 年、防大を卒業してからちょうど 40 年が経過した。私も妻も既往の大病も無く健康で元気に生活している。福岡と広島で暮らす二人の息子はそれぞれに家庭を持ち、二人の孫も授かった。かつての持久力や瞬発力、記憶力こそ無いかもしれないが、まだまだ人の役に立てる力は残っている。これからも高い目標を掲げることよりも、とりあえず自分に見える地平の中でしっかりと力を尽くしていきたいと思う。（了）

会長ルーム・活動録

ホーム・カミング・デー　２(HCD2)

ホーム・カミング・デー２（以下「ＨＣＤ２」）は、卒業式に併せて行われるホーム・カミング・デーと同様に、入校式に同窓生を招待するものです。ＨＣＤ２は、國分学校長の発案により今年（平成２８年）から始められた行事で、第６４期生入校式に１期生～４期生が招待されました。

４月５日（火）の入校式当日は、朝から生憎の小雨模様にもかかわらず、入門開始の８時には入校生の父兄等が正門前に長い列を作っていました。正門にはＨＣＤ２参加者を識別する為に、各期の担当者に待機してもらいましたが、ＨＣＤ２参加者は同期の顔を見つけては、久しぶりの再会なのか懐かしそうに声を掛け合いながら、正門を通過していきました。

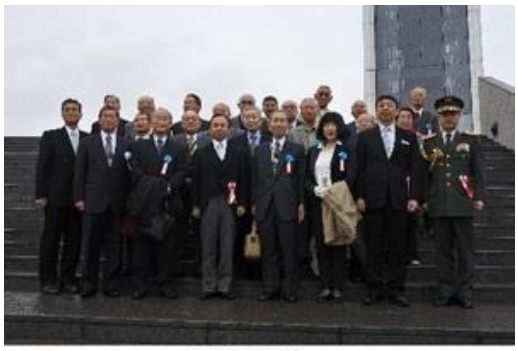
防衛学館１階で各期毎の受付を済ませた参加者は、各期毎に割り当てられた待機部屋で思い出話しや近況報告に花を咲かせました。

防衛学館での受付

防衛学館での歓談

参加者は、９時過ぎに防大職員の引率の下、各期毎に入校式典会場である記念講堂に向け移動しました。そして、会場へ入場する前に、講堂前の大階段でクラス毎に記念の集合写真の撮影を行いました。写真撮影には、國分学校長以下４役が、雨が心配される空模様にもかかわらず式服のまま参加され、また、同窓会長名代として入校式に参列する外薗・同窓会副会長も加わりました。

第１期生



第２期生

第３期生

第４期生

ＨＣＤ２参加者は、同窓生のご家族を含めて１期生が１９名、２期生が２０名、３期生が５５名、４期生が６１名の計１５５名で、入校式に臨む第６４期本科学生４９３名及び研究科学生９３名を見渡すように会場の一角に用意された席につきました。

入校式は、１０時に、若宮・防衛副大臣の臨場をもって開始され、国歌斉唱、任命・宣誓・申告に続いて、学校長式辞、防衛副大臣訓示、そして統合幕僚副長による来賓代表祝辞と、滞りなく進められました。

國分学校長は式辞の冒頭で「本年度の入校式には、本校の第１期から第４期までの平均年齢８０歳の卒業生の方々がご家族を含めて参列されています」と紹介されました。そして、「（ＨＣＤ２）参加者に宜しく伝えてほしい」と安倍総理からも言及があったことを披露されるとともに、「保安大学校の時代から、大きな志とプライドを持って防衛大学校の基盤づくりに尽力され、今日の繁栄の土台を築かれた第１期から第４期の大先輩の皆様に、盛大な拍手をお願いいたします。おかえりなさ

学校長式辞

起立し謝意を表する参加者

い。」と述べられ、拍手の中ＨＣＤ２参加者は総員立ち上がり頭を下げ謝意を表明しました。

入校式の後の観閲式では、ＨＣＤ２参加者の為に式典が見渡せる場所に席が用意され、新４学年

観閲式見学①

観閲式見学②

となった第６１期生の指揮の下で済々と行われる観閲式を見学しました。

観閲式終了後、ＨＣＤ２は期生会毎の行動に移り、１期生及び４期生は防衛学館の教室を借りて昼食会、２期生及び３期生は校外での昼食会へとそれぞれ移行しました。

１期生及び４期生は、昼食会の後に学校職員及び学生の案内により、第２大隊学生舎を見学しま

学生舎見学①

学生舎見学②

した。当初は、学生舎見学をもってＨＣＤ２は終了となる予定でしたが、学校長から参加者と面談したいとの申し出があり、１期生及び４期生は学生舎から防衛学館に移動し、國分学校長以下４役及び外薗・同窓会副会長と面談しました。特に、第１期生との面談は、口ノ字に並べられた防衛学館の机を囲んでの懇談会となり、終始和やかな雰囲気の中で３０分間にも亘り続けられ、１期生から連綿と繋がる防衛大学校同窓生及び同窓会に対する國分学校長の熱い思いをあらためて感じさせるものとなりました。

学校長と第１期生との懇談

終わりに、今回のＨＣＤ２の実施にあたり、初めて且つ短い準備期間であったにも拘らず、実現に向け最大限の努力を傾注していただいた１期生から４期生までの各期生会担当者の皆様のご労苦に対し心からの慰労と感謝を申し上げますとともに、準備から本番まで親身になってご支援いただいた防衛大学校職員の皆様に心から感謝申し上げます。

（同窓会本部事務局事業部ＨＣＤ２担当記）

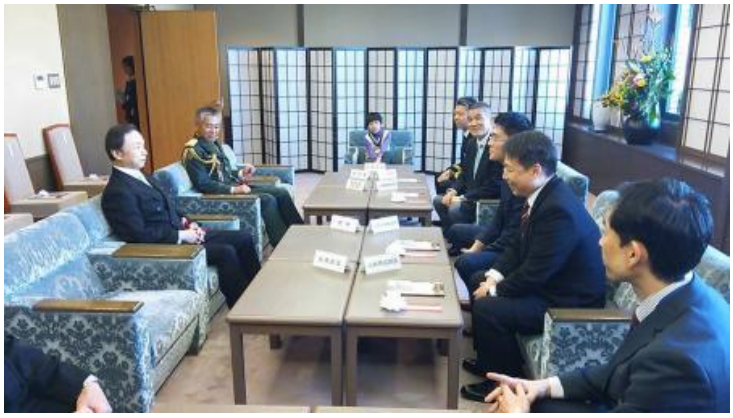
第 40 期ホーム・ビジット・デー(HVD)

１１月１９日（土）、２０日（日）の両日、防衛大学校において「飛躍」をテーマとして平成２８年度開校記念祭が開催され、本科第４０期生は併せて企画されたホーム・ビジット・デー（ＨＶＤ）に参加し、同期生との再会の機会を得ることができました。

第４０期生は、本科学生への女性の受け入れ（防大女子学生第１期生の誕生）等、防大の歴史の中でも象徴的な変化を担う世代として平成４年（１９９２年）に入校しました。折しも冷戦終結後世界が大きく変わる中、我々は学生時代を過ごしました。卒業後は幹部自衛官として、次第に拡大する国際の場における各種任務の遂行や大規模災害対処に携るとともに、防衛力整備を担う実務者としての役割を担ってきました。また退職した同期生たちも、起業したり、地方政治家に転身したりと、様々な分野で頑張っております。

ＨＶＤが行なわれた１１月２０日（日）は朝から晴天に恵まれ、遠くはシンガポールや九州から卒業生１００名、ご家族を含めると１８２名が防大に集まりました。

当日は、まず第４０期生会長清水徹君ほか５名の準備組織代表者による國分良成学校長への表敬を実施しました。期生会長からＨＶＤ実施の機会をいただけたことへの謝意を伝えるとともに、学校長からは、最近の防大における取り組みについて紹介いただきました。



〔期生会長等による学校長表敬〕

観閲式は、予め席を準備していただいたおかげで間近に見ることができました。

観閲式後の空挺団による展示で降下した隊員の一人は、なんと同期生の久我健二君。大いに盛り上がりました。

〔降下を終えた久我健児君〕

その後、懇親会が行なわれ、大いに旧交を温めることができました。

〔清水徹同期生会長による挨拶〕

祝賀会食終了後、ＨＶＤ懇親会へご参加いただきました國分学校長からは、「世界一の士官学校」を目指して取り組んでいること、そして体力だけでなく勉学、特に英語力の強化に取り組まれ

ていること等を紹介いただきました。校内の施設も多くが新しくなり、我々の卒業後２０年を経て母校が大きく進化してきていることを感じることができました。

〔國分学校長によるお言葉〕

〔折木同窓会長による激励〕

〔女子１期生と学校長との懇談〕

〔司会の二人〕

また、卒業２０周年を記念して防衛大学校に「姿見」を贈呈させていただき、すでに４大隊学生舎１階に設置してもらっています。

〔記念品の贈呈〕

最後は、応援団リーダー部の皆様にリードしていただきながら、全員で肩を組んで逍遥歌、そして大石和浩君による一本締め。全員で記念撮影を実施して懇親会を終えました。

〔全員での逍遥歌〕

〔大石和浩君による一本締め〕

〔全員で記念撮影〕

懇親会の後は、２大隊の学生舎屋上へと移動し、棒倒し観戦を楽しみました。その際、棒倒し競技開始前の学校長の激励挨拶の中で、我々のＨＶＤについて、ご紹介があったことも、良き思い出となりました。

また、ＨＶＤの様子は予め作成したＳＮＳ上のグループを通じても発信し、参加が叶わなかった遠方の同期生にも当日の雰囲気を感じてもらうことができました。

こうして第４０期生のＨＶＤは幕を閉じました。

（第４０期同期生会業務幹事 兵庫 剛 記 、同窓会事務局事業部ＨＶＤ担当校正）

平成２８年度防衛大学校同窓会代議員会等（実施報告）

平成 29 年 3 月 11 日（土）明治記念館において平成 28 年度防衛大学校同窓会代議員会・講演会・懇親会が開催され、28 年度の同窓会事業を締めることができました。

1　代議員会(1330～1550)

代議員総数 182 名（出席 82 名、委任 100 名）の出席を得て、代議員総数 248 名の過半数以上の代議員会設立要件が満たされました。

代議員会は、以下の次第で実施されました。

- 折木会長挨拶（16 期陸）
- 議長選出
- 諸案審議（平成 27 年度同窓会事業報告・決算報告・会計監査報告、平成 29 年度事業計画案・事業予算案、同窓会会費に関する細則の改正案、新役員の選出案）
- その他（防衛大学校の現状と取組みについて、同窓会からのお知らせ）

同窓会からのお知らせとして平成 29 年度代議員会等について開催日時等の説明がされました。

2　講演会（1600～1715）

危機管理コンサルタント　丸谷元人氏を講師として、講演会を実施しました。

細部については次のとおりです。

・　講演会講師　危機管理コンサルタント　丸谷元人

・　演題「在外邦人救出に立ちはだかる課題」

・　参加者 169 名

3　懇親会（1730～1900）

講演を実施して頂いた丸谷氏等にも参加を頂き、終始和やかな雰囲気の中、盛会のうちに終了しました。参加者 141 名

第１８期ホーム・カミング・デー（HCD）

2017.04.20

平成１２年３月に第６代松本三郎防衛大学校長の発案で卒業式典に第１期生を招待して始まったホーム・カミング・デー（以下、ＨＣＤという。）も今年で１８回目となり、卒業後４３年目にあたる第１８期生が平成２８年度卒業式典（本科第６１期生等）に國分良成防衛大学校長の招待を受けて実施されました。

１８期生ＨＣＤの行事は、卒業式前日の３月１８日(土)１６時３０分からの横須賀平安閣でのＨＣＤ前夜懇親会で幕を開けました。

当日は晴天の春の暖かい天候で、開会の１時間前から続々と１８期生及びご家族が参集し、開始前からすでに熱気に溢れていました。懇親会は、１８期生１３６名、ご家族６０名、総勢１９６名が集う中、１６時３０分に國分学校長、武藤副校長、岸川幹事、各部長等９名のご来賓の参加をいただき、司会の笠原久氏の開会の辞で始まりました。開会後、最初に同期生の２名の殉職者及び３０名の物故者に対し、「国の鎮め」が流れる中、黙祷が行われた後、ＨＣＤ実行委員長（１８期生会長）の火箱芳文氏から、久々の再会を祝するとともに、本ＨＣＤを支援していただいている防衛学教育学群の担当者、２年前から準備をしてもらった準備スタッフ、各係へのお礼や懐かしい学生時代の生活内容を謡った口上などの挨拶がありました。

次に、来賓を代表して國分学校長からは、「１８期生の皆さんお帰りなさい！」との歓迎の言葉に引き続き、今年の卒業生(６１期生)の状況や防衛大学校は総合力で日本一の大学であり、そして世界一の士官学校を目指しているなどの力強いお言葉があり、最後に「ＨＣＤは中間地点でありＨＣＤ２にも元気で参加してほしい。今日は外出点検を行った後、特外を認める。明日の朝は帰隊遅

延のなきように！」などのユーモア溢れる挨拶がありました。

宴会の乾杯は、ＨＣＤ実行委員会海上部会長（次期１８期生会長）杉本正彦氏が、今日は昔を懐かしむとともに、最近の防大の状況を大いに語ろうと乾杯の音頭をとり、懇親会が始まりました。懇親会開始後、ご来賓の同席をいただき各大隊ごとの記念写真撮影を行いましたが、違う大隊に入り込むハプニングなどもあり大いに盛り上がりました。

(挨拶する火箱 18HCD 実行委員長)　(祝辞を述べる國分学校長)　(乾杯の挨拶をする杉本海上部会長)

会場は１～５大隊の大隊別で配席され、久しぶりの再会で相互に名前と顔を確認しながらの場面も見かけられましたが、久しぶりの再会にみんなが喜び合い、会員同士、奥様同士で会話が弾み、和やかで、大盛況に進みました。國分学校長は、精力的にすべてのテーブルを回られ皆さんと楽しく歓談され、写真撮影にも応じられていました。

懇親会は、笠原久氏の明るく元気な司会で盛り上がり、学校長をはじめとした来賓を含めた全員による肩を組んでの逍遥歌斉唱へと移行し、最後に、ＨＣＤ実行委員会航空部会長の外薗健一朗氏の防大の発展と同期生の長い絆を祈念しての万歳三唱の音頭で懇親会はお開きとなりました。

(各大隊ごとの記念写真撮影)

(歓談の状況)

(歓談の状況)

(逍遙歌斉唱)

(逍遙歌斉唱)

(万歳三唱の音頭：外薗航空部会長)

卒業式当日も晴天の春の暖かい天候で、朝８時過ぎから続々と集合場所である防衛学館の教場に到着し、８時５０分には１８期生１２９名、ご家族１０６名、総勢２３５名が陸・海・空に分かれてそれぞれの控室に集合を完了しました。行事関連の説明を受けた後に記念写真の撮影場所である時計台横の階段に向かい、國分学校長、渡邉副校長、岸川幹事の参加をいただき、全員で記念写真撮影を実施した後、卒業式会場である記念講堂に向かいました。

(正門の状況)

(控室の状況)

(時計台横での記念写真撮影)

今年も学校側から記念講堂内に１４０席をいただくとともに、記念講堂に入れない方には、例年記念講堂地下のＡＶ講堂で見学させていただいておりましたが、今年は都合により急遽防衛学館の控室に準備していただいたスクリーンにより卒業式の見学となりました。

予定どおり１０時に安倍内閣総理大臣が臨場され卒業式が始まりました。学校長から留学生を含む４０１名の本科卒業生及び７６名の理工学・総合安全保障研究科卒業生に一人一人卒業証書が授与された後、福田秀樹大学改革支援・学位授与機構長から学位記が授与されました。

國分良成学校長の式辞においては、昨年に引き続きＨＣＤについて言及され、「防大では、２回のＨＣＤがあり、１回目は卒業４３年で卒業式に、２回目は入校６０年で入校式にそれぞれお招きしています。本日の卒業式には、昭和４９年（1974 年）に防大を卒業された第１８期の皆さんが多数参列されています。今日の日本の平和と繁栄は、第１８期の防大卒業生の皆さんが過酷な条件下で厳しい任務と責任を果たされた賜物であります。崇高な使命を見事に完遂されて、本日無事に帰校された第１８期の皆さんに盛大な拍手をお願いいたします。」との言葉に、会場からは盛大な拍手が起こり、その祝福に応え１８期生とご家族１４０名が起立し、敬礼をしました。

そして、卒業生に対し、「諸君たちは防大で学識ある勇者に成長したはずです。そのプライドを

持って、君たちを必要とするこの国と国民、そして世界のために今後とも日夜精励して下さい。」

と激励されました。

(防大儀仗隊から栄誉礼を受ける安倍総理大臣)

(１８期生を紹介する國分学校長)

(起立する１８期生)

(敬礼をして応える１８期生)

自衛隊最高指揮官である安倍晋三内閣総理大臣は、訓示の中で今回初めて、ＨＣＤについて言及され、「行動を起こせば批判が伴う。これは今も昔も変わりません。安保条約を改定した時も、Ｐ

ＫＯ協力法を制定した時も、戦争に巻き込まれるといった無責任な批判がありました。しかし、果敢に行動してきた先人たちのお陰で、私たちは、戦後一貫して平和を享受することができた。そのことは、歴史が証明しています。先ほど國分学校長から御紹介があったように、本日はＨＣＤとして、昭和４９年に防衛大学校を卒業したＯＢの皆さんもお集まりです。皆さんも在職中、心ない多くの批判にさらされてきたかもしれません。そうした批判にも歯を食いしばり、皆さんは、自衛隊の中枢にあって与えられた任務を立派に全うしてこられた。そして、米国や志を共にする民主主義諸国とともに、冷戦を勝利へと導きました。卒業生諸君、そして御列席の皆様。この大きな仕事を成し遂げ、本日、懐かしきこの学びやに戻ってこられたＯＢの皆さんへの心からの感謝と歓迎の気持ちと敬意を、私からも皆様と共に大きな拍手をもって贈りたいと思います。」と述べられ、安倍内閣総理大臣の拍手に合わせて会場の全員から１８期生が再度祝福を受け、一同最大の誇りと感謝で感極まるとともに、感激でＨＣＤ最大の盛り上がりとなりました。

　そして、卒業生に対し、「いかなる事態にあっても、国民の命と平和な暮らしは守り抜く。そのために必要な制度をこの４年間で整えました。私たちの子や孫、その先の世代に、平和な日本を引き渡していくための法的な基盤をしっかりと築き上げることができた、と考えています。その新しい土台の上に諸君が、本日、自衛官としての新たな一歩を踏み出します。諸君は、新しい安全保障基盤を実行に移していく、いわば一期生であります。この場所から、新しい歴史をつくりあげるのは、正に諸君であります。諸君の活躍を大いに期待しています。」と述べられ、最後に「この場所から新しい歴史をつくりあげるのは、正に諸君であります。その気概を持って、いかに厳しい現場にあっても、鍛錬を積み重ねてもらいたい。自衛隊の中枢を担うという強い使命感と責任感の下に、いかなる時も、成長への努力を惜しまないでほしいと思います。そして将来、諸君の中から最

高指揮官たる内閣総理大臣の片腕となって、その重要な意思決定を支える人材が出てきてくれる日を楽しみにしています。」などと熱く、かつ、力強く訓示されました。

防衛学館の控室に設置されたスクリーンで卒業式を見学していた１８期生からは、国歌斉唱、國分学校長のＨＣＤの言及、安倍内閣総理大臣のＨＣＤの言及・拍手の際には、盛大な拍手が起こり、特に、安倍内閣総理大臣のＨＣＤの言及には、驚きとよくぞ言っていただいたという感謝の雰囲気に包まれました。

(訓示を述べる安倍総理大臣)

(控室(防衛学館)のスクリーンでの卒業式見学)

稲田朋美防衛大臣は訓示において、「涙とともにパンを食べたものでなければ、人生の本当の味は分からない」というドイツの詩人、ゲーテの言葉を引用し、「小原台で時にはつらく涙するほど苦しいことを乗り越えてこの卒業式に臨んでおり、伝統ある防大での教育を修め、卒業した皆さんは自衛隊における人生の本当の味をかみしめるべく、これからさまざまなことを創造し、更に、たくましく成長されると確信しています。」と最初に激励されました。

その後、「最近の北朝鮮や中国の情勢から、わが国の防衛を担う自衛隊に求められる役割や期待

は一層大きくなっており、こうした現実を直視し、自衛隊への期待を受け止め、将来、幹部自衛官となるものとしての自覚を持ち、緊張感を持って任務に邁進してほしいと思います。」と述べられるとともに、「地震、風水害、火山噴火、雪害等において、自衛隊は多岐にわたり災害派遣活動をしていますが、こうした活動は、必ずしも華々しいものではありませんが、その活動の１つ１つが国民の安全な生活につながっていることは疑いようがなく、そうした活動により、先輩たちが築き上げた自衛隊に対する国民の信頼と、それに伴う伝統という財産を余すことなく受け継ぎ、創造の精神を持って、より一層発展させてくれることと期待をしています。」などと激励されました。

安倍内閣総理大臣、稲田防衛大臣の訓示は、自衛隊に対する労いや感謝や敬意に満ち溢れ、卒業生に対する大いなる思いと期待が込められたものと深い感銘を受けました。

来賓祝辞は、向井千秋東京理科大学副学長・宇宙飛行士が述べられました。向井副学長の自らの医師と宇宙飛行士の経験から、「人生においては悩むことがあるが、悩むことすら許されずに亡くなる方がいる。そういった亡くなられた方のためにも、能力を向上させて、しっかり準備をして仕事に臨んでほしい。」や「任務を達成させたいという共通の目標を持つことや特性が違う人間が集まることにより力を発揮し仕事がうまく行く。また、立ち位置をより高所大所から見ると仕事がうまく行く。」などの餞の言葉を贈られ、最後に「任務や仕事を通じて成長されることをお祈りします。」と激励されました。

卒業証書授与、学校長式辞、内閣総理大臣訓示、防衛大臣訓示、来賓祝辞に引き続き、１１時４５分から、４年間を振り返っての卒業生代表の答辞、防大生として歌う最後の「学生歌」を斉唱し、卒業式は終了しました。

卒業生解散のアナウンスの後、昨年に引き続き壇上から安倍内閣総理大臣が見守る中、卒業生代

表の「６１期解散」の指示により、卒業生が一斉に帽子を投げて駆け足で会場から退席する卒業式恒例行事の「帽子投げ」が行われました。この際、会場は一瞬騒然となりましたが、卒業する元気で立派な若者を微笑ましく、晴れやかな気持ちで見送り、会場は清々しい雰囲気に包まれていました。

(訓示を述べる稲田防衛大臣)　(祝辞を述べる向井東京理科大学副学長)　(学生による帽子投げ)

その後、陸･海･空それぞれの幹部候補生の真新しい制服に着替えた卒業生が整列して待機する中、安倍内閣総理大臣が臨場し、１２時３０分に一般幹部候補生の任命宣誓式が開始されました。まず、陸上・海上・航空幕僚長が各要員ごとに一般幹部候補生に任命しました。その後、陸･海･空幹部候補生全員で宣誓を行い、各代表が安倍内閣総理大臣に宣誓書を手渡し、握手を交わしました。１８期生からは、「我々のころは任命宣誓式を観閲式の会場(陸上競技場)でやった」と回顧する声も聞かれました。

(陸曹長に任命する岡部陸上幕僚長)（海曹長に任命する村川海上幕僚長) (空曹長に任命する杉山航空幕僚長)

なお、卒業式終了後から任命宣誓式の開始までの間に、記念講堂横の顕彰碑において１８期生代表による顕彰碑献花式が行われました。１８期生は、故山川渡氏（防大１学年）、故北林正人氏（２等海尉）の２名の殉職者があり、ＨＣＤ行事に参加した中から約８０名が献花式に参列し厳粛に式が行われました。最後に全員が２名の殉職者と同期生３０名の物故者のご冥福を祈り、式は終了しました。

(宣誓書を受領する安倍総理大臣)　　(顕彰碑献花式)

任命宣誓式終了後、陸上競技場において３学年以下の在校生による観閲式が行われました。観閲式には陸・海・空自衛隊の防大を卒業した先輩が操縦する６機種１８機の航空機による観閲飛行も行われ、観閲式に花を添えました。１８期生は競技場の一角に設けられたＨＣＤ席で観閲行進、観閲飛行を見学し、整斉とした学生の姿に当時の自分を重ねるとともに、惜しみない拍手を送っていました。

観閲式見学をもって１８期生ＨＣＤの全体行事は終了し、この後、希望者は二つのグループに分かれ第１大隊と第２大隊の学生舎を見学しました。各学生舎では、指導官及び３学年・２学年の学生がグループごとに研修を担当して、１８期生やご家族からの質問にも親切に答えてくれていました。現在の学生舎は１８期生が在学した当時と同じ各学年混在の８人部屋に戻っていますが、女子学生や多くの留学生の存在など状況はずいぶん異なり、また住環境は当時と比べ格段に良くなっており、時代の流れを実感しているようでした。

(観閲式場の HCD 席の状況)

(整列する学生隊)

(巡閲する稲田防衛大臣)　　(巡閲から戻る稲田防衛大臣に声援を送る 18 期生)

(行進する学生に声援を送る 18 期生)　　(佐藤参議院議員(27 期生)との記念撮影)

(解散を宣言する火箱 18HCD 実行委員長)　　(自習室の見学)

最後に、１８期生ＨＣＤの実施に向け、２年前から準備を進められた１８期生実行委員の皆様の活動に対して心からの慰労と感謝を申し上げますとともに、ＨＣＤの準備から実施に至るまで親身にご支援いただきました防衛学教育学群長をはじめとする防衛大学校職員の皆様に心から感謝を申し上げます。

（同窓会本部事務局事業部ＨＣＤ担当記）

講話録・投稿文

新入生（64 期生）に対する OB 講話

平成 28 年度の防大新入生に対する OB 講話は、4 月 7 日、23 期（海）の福本出氏により実施されました。当日の日程は、防大に 1110 到着後、教務部長等との懇談～副校長等との懇談～写真撮影～会食が行われた後、新入生対する OB 講話が実施され、最後に資料館見学後 1545 離校という流れで行われました。

講演の概要は次のとおりでした。

- 日時：4 月 7 日（木）1330～1430
- 講話者：23 期（海）福本 出(元海将、元海自幹部学校長）
- 演題：「勘違い防大生　海将になる」
- 対象：1 学年（64 期生）総員及び聴講を希望する教職員　約 600 名
- 会場：記念講堂

（講演内容）

中高吹奏楽部だったから音楽隊に入れると勘違いして防大に入校したので、 何とか頑張って卒業したのに、候補生学校に行って音楽隊に入れないと知ってからも辞めたいの連続だったが決断できなくて最後まで務めたけど、「万事塞翁が馬」今はそれで良かったと思っているので、「辞めた

いと思った時は、もう少しだけよく考えて欲しい。それでもダメな時は別の人生を選ぶことは止めない。」と 言った内容を、時折、頭髪の話題で笑いを取りながら話されました。学生から 「なかなかベットメーキングやアイロンができないのですが先生はどうでしたか？」の質問に「日本には「守破離」という言葉があるとおり。まず型にはめる ことから始めるが、それができるのが今だけなので頑張って！」とまとめられました。公演後、学生に感想を聞いたところ、「とても面白かった。また、海将までなられた先輩の防大入校時のエピソード、任官した後でもいろいろ悩みがあったことなどを聞いて興味深かった。」とのことでした。

（講話後記）

講話者の福本氏に講話原稿をとお願いしたところ、「原稿無しの講話」とのことでしたが、講話を振返り書き起こしてもらいましたので、講話後記として紹介します。

「防大 64 期生に対する特別講話を終えて」（23 期海上代議員 福本 出氏）

（小原台事務局担当記）

防大 64 期生に対する特別講話を終えて

23 期海上代議員 福本　出

　防大同窓会事務局からの依頼を受け、4 月 7 日、私は 23 期生を代表し、この春に入校したばかりの新入生、防衛大学校本科第 64 期生に対する特別講話のため、久しぶりに母校の正門をくぐった。思えば 不安一杯にこの門を通った時から 41 年の年月が経っていた。あの日 はどんな天気だっただろうか。思い出多き小原台の坂道には、春の嵐に桜の花びらが舞っていた。

　折しも 3 月に行われた 60 期生の卒業式を報じる新聞には、『任官 拒否倍増』という文字が躍り、平和安全法制議論にからめた報道ぶりも目立った。同時に、東・南シナ海における中国の強圧的な政策にかかる周辺国との軋轢や、北朝鮮による暴挙が相次いで報道される最中に迎えた防大入校である。防大進学の決意にかかる心の揺らぎは、例年の新入生よりも大きいかも知れない。そのような彼らに、ありきたりな思い出話をしたところで心に響かないだろう。格好つけることはやめよう。なにしろ私自身、自衛隊の幹部を養成する大学とも認識せず、音楽隊に行けるかと思って入学したのだ。そのうえ体力測定も級外、身体検査で見つかった病巣を夏休みに外科切除することが入校許可の条件になり、術後はずっと“体育止め”になるなど、放校寸前のスタートを切った。そんな防大生だった私が、その後もことある毎に迷いに迷いながら、どんな自衛官人生を歩んだのかを、飾らずに話そうと準備した。

　本館玄関にお出迎えいただいた香川教務部長の傍らには同期の香月教授もいる。

　「入校式まで桜が見られるのは稀なことです」。

　教務部長は、そう言いながら応接室に案内してくれた。

　副校長や幹事、訓練部長等との懇談の機会に、この春に任官しない学生が多く出た理由をお伺い

した。「任官後に各候補生学校に行ってすぐ（あるいは行かずに）辞めるのは、信義にもとる」との國分校長の指導により、迷いを持つ学生との面接を重ねた上で防大卒業の時点で決断させた結果であり、各自衛隊幹部候補生学校入校までに辞めた人数で比較すれば、例年と大きな差違はないとの説明であった。概ね推察していたとおりの回答であったことに安堵した次第である。

記念講堂に集合した新１年生約 440 名は、代表学生の号令のもと一斉に起立した。ネイビーブルーの制服姿も颯爽と、機敏な挙措動作からは、つい１週間ほど前まで高校生であったとは想像もつかない。しかしその一方で、はるか昔、入校式前に筋肉痛がするほど、ひたすら起立と着席の訓練をしたことが脳裏にうかんだ。

制服に身を包むと一人前の防大生に見えるが、いまだ自衛隊の部隊を一度も訪問したこともない学生がほとんどである。講話には写真をふんだんに取り入れたスライドを準備して、極力視覚的に紹介するよう努めた。

講話の表題は『勘違い防大生、海将になる』とした。

着校以来、すでに 10 名以上が辞めたという。

ことある毎に進退を迷い続けた我が半生を紹介し、遅疑逡巡の末にも自衛官として勤めあげることができた先輩がいたことを知ってもらえば、急激な環境の変化にためらう学生が「自分にもやれるかも知れない」と自信を持ってくれるのでは、との願いを込めたつもりである。

私が防大生であった当時の自衛隊は、長沼ナイキ訴訟の第一審で出された自衛隊違憲判決、それを打ち消す二審判決がでるなど、防大同窓会員先輩方の時代と同じく、その存在自体すら否定する冷たい世相が自衛隊に向けられていた。そんな時期に候補生に任官した私が、自衛隊にとどまってやっていこうと思ったきっかけは、江田島にこられた大賀海幕長が柔和な笑顔で語りかけてくれた

講話だった。私はそんな記憶をもとに、大賀さんには及ばないまでも、迷っている学生がいたら同じように伝えたいと思った。

大賀海幕長は確か、**「自分はいま海幕長としてではなく、オールドセーラーとしてヤングセーラーに語りかけている。自分はなにも特別な人ではなかった。ただ目の前のことを懸命にやってきただけ。気がつけば今の自分がいた。」**というようなことを述べられたと思う。雲上人ではなく、こんなにてらいのない方が海自のトップなのだ、ということは意外であり、私は励まされたのだと思う。

私にとって、自衛官人生最後の職は、海上自衛隊幹部学校長だった。海上自衛隊の核心に育ちゆく学生を預かる身となるにあたり、私は海幹校のみならず、防衛大学校創設当時の指導者たちが、敗戦間もない当時、新生日本の軍事組織のリー ダー教育にどのような理念を込められたのか、それぞれの創設に尽力された方々の手記を紐解いた。そのような中でも強く印象づけられたのは、初代槇智雄校長と、小泉信三両氏の言葉だった。

槇校長が、１期生を始めとする草創期の防大生に述べられた珠玉の言葉数々は『防衛の務め』に残されている。中でも“国を守る”ということについて **「防衛の任務は高貴なもので、心魂を投ずるに価するものである」**と述べられている。

また、小泉氏による講話は『任重く道遠し』に納められている。小泉氏は、次の４点を繰り返し述べられた。

・常に真実を語れ

・物事を他人の身になって考え得る人であれ

・感謝を知る人であれ

・己の非を認める勇気を持て

国家存亡の危機に瀕した日本が焼土からの再起を期するとき、その国を守る新たな武力組織のリーダーに求められたのが、この４つであったことを知るとき、非常に深く重たいものを感じる。すなわち、もし旧軍のリーダーたちがこの４つの徳目を備えなかったとの反省に立ってのことだ考えれば、である。

これらの著書は、自分が防大生のときも読んだ記憶がある。しかし、その時の自分には両氏の教えを受けとめる器がなかった。そして今、防大新入生に相対するとき、防大創設時の理念をかみ砕いて紹介してあげたかったのだ。

目があった幾人かの学生の表情からは、なにがしかのものが届いたのではないかと感じられた。

講話終了後、資料館に案内していただいた。

そこには槇記念室があり、まさに先刻１年生たちに紹介した槇校長や小泉氏の言葉がしるされていた。

「私立大学では、創業者の理念が残り今も大事にされている例を見ることがあるが、国立大学で見ることは希だ。防衛大には創設時の理念が生き続けているのですね」。資料館を見学された部外講師の一人がそのように述べられたと、教務部長から伺った。

我が同期も、陸幕長と海幕長を残すのみとなり、ほとんどの者は制服人生を全うして、 第二の人生を歩み始めている。制服を脱いで間もない今、防大に入ったばかりの彼らが一段とまぶしく見える。彼らが歩む自衛官としての道は、冷戦及びポスト冷戦期に自衛官であった私たち OB が歩んだそれよりも厳しいものであるかも知れない。

「頼むぞ」という気持ちを胸に、桜と鳩の校章輝く校舎を後にした。

連絡事項

平成２７年度防衛大学校同窓会決算書

平成27年度　一般会計 収支計算書

平成28年3月31日現在

【単位：円】

区分		事　業　等			27年度予算額	27年度決算額	差　異	備　　考
一般会計	収入	同窓会費			25,547,000	24,754,200	−792,800	59期生 399名、個別19名
		預貯金利息・国債利金			590,000	1,461,848	871,848	国債利息増、国債買換え益
		雑収入			1,330,000	1,294,940	−35,060	貸金庫返金、懇親会参加186名
		収入合計（①）			27,467,000	27,510,988	43,988	
	支出	母校の充実・発展への寄与	1	新入生に対する講話	5,000	0	−5,000	交通費：防大負担
			2	第4学年に対する講話	5,000	0	−5,000	交通費：防大負担
			3	各種競技会支援	500,000	497,490	−2,510	カッター、水泳、断郊・持続走
			4	期生会発会等支援	600,000	598,446	−1,554	卒業ダンスパーティー等
			5	学生の部隊実習支援	1,040,000	1,030,130	−9,870	第3学年415名
			6	顕彰碑顕花式支援	340,000	425,622	85,622	顕彰版作製費の増、テーブルクロス購入
			7	開校記念祭支援	2,340,000	2,283,304	−56,696	パンフレット作成等支援
			8	校友会対外活動支援	1,000,000	810,000	−190,000	1委員会、18部、9同好会等
			9	学術向上策支援	240,000	235,940	−4,060	優秀研究レポート15作品(陸、海、空別)
			10	同窓会著作等の寄贈	50,000	6,458	−43,542	
			11	留学生学業基盤整備支援	440,000	436,000	−4,000	留学生20名
			小　計（②）		6,560,000	6,323,390	−236,610	
		会員相互の親睦交流	12	同窓会ホームページの運営	400,000	680,522	280,522	年間サポート費（2年契約）
			13	会員の慶弔業務	1,000,000	357,058	−642,942	物故者数94名
			14	各種競技大会による交流	300,000	187,912	−112,088	テニス・ゴルフ・囲碁
			15	地域支部等への助成	670,000	673,202	3,202	北陸・東北・徳島・東海・大分（5コ支部） 海外支部等への旅費、交通費増
			16	卒業留学生との交流	230,000	0	−230,000	
			17	HVD（ホームビジットデー）支援	320,000	304,952	−15,048	39期96名（家族等含め257名）
			18	HCD（ホームカミングデー）支援	350,000	355,350	5,350	17期195名（家族等含め300名）、雑費増
			19	講演会・懇親会の実施	3,800,000	3,843,709	43,709	案内状、会場使用料 会場使用料の増加
			小　計（③）		7,070,000	6,402,705	−667,295	
		社会活動への寄与	20	安全保障講座支援	100,000	100,216	216	
			小　計（④）		100,000	100,216	216	
		会務運営基盤の充実	21	代議員会の実施	800,000	906,549	106,549	葉書395枚、資料400部、交通費17名 交通費（旅費）増加
			22	同窓会名簿の維持	10,000	32,620	22,620	交通費増
			23	期生会名簿の作成支援	40,000	0	−40,000	
			24	地域支部等の設立支援	400,000	312,920	−87,080	インドネシア支部設立支援
			25	会費納入の促進	650,000	648,586	−1,414	同窓会徽章、交通費等
			小　計（⑤）		1,900,000	1,900,675	675	
		検討事項	26	社会貢献活動の在り方検討	50,000	0	−50,000	
			小　計（⑥）		50,000	0	−50,000	
		維持管理	事務費		700,000	703,167	3,167	雑費増
			通信費		350,000	318,912	−31,088	
			交通費		400,000	477,280	77,280	交通費増
			会議費		150,000	156,255	6,255	雑費増
			事務員雇用費		1,330,000	1,320,000	−10,000	
			事務所賃貸費		5,340,000	5,354,556	14,556	賃貸費増
			小原台事務局運営費		140,000	147,488	7,488	雑費増
			小　計（⑦）		8,410,000	8,477,658	67,658	
		支出計（⑧＝②＋③＋④＋⑤＋⑥＋⑦）			24,090,000	23,204,644	−885,356	
		予備費（⑨）			3,377,000	1,798,669	−1,578,331	海外訪問、同窓会徽章の纏め買い等
		支出計（⑩＝⑧＋⑨）			27,467,000	25,003,313	−2,463,687	
収入総計（①）					27,467,000	27,510,988	43,988	
支出総計（⑩）					27,467,000	25,003,313	−2,463,687	
次年度への繰り入れ額（⑪＝①－⑩）					0	2,507,675	2,507,675	

平成27年度寄付会計　収支計算書

平成28年3月31日現在

【単位：円】

区分		項　目	金　額
寄付	収入	29期期生会	351,049
		収入計（①）	351,049
	支出	振込手数料	432
		物品購入（半被×30着）	301,800
		物品購入（ドラム×1）	48,817
		支出計（②）	351,049
次年度への繰り入れ額（③＝①-②）			**0**

※：収支決算書(一般会計）に含まない。

平成２８年度期生会長・代議員名簿

2016.3.23

期	期生会会長		代　議　員			業務幹事	
	氏　名	要員	陸:氏　名	海:氏　名	空:氏　名	氏　名	要員
1	高橋　恒清	空	大東　信祐	高山　雅司	田中　憲明	二宮　隆弘	空
2	林　赳夫	海	吉田　暁路	石原　公夫	大庭　肇	石原　公夫	海
3	西元　徹也	陸	中口　廣之	手塚　正水	出口　哲夫	井上　陽	陸
4	石川　信隆	陸	金田　孝之	櫻澤　清志	渡邊　丈二	宍戸　辰雄	陸
5	中村　雅嘉	空	辻川　健二	岩田　威	山田　秀次郎	浅野　勇蔵	陸
6	阿部　英輔	陸	池田　勝	福塚　啓二	星野　元宏	福塚　啓二	海
7	江藤　兵部	空	津村　秀一郎	高木　基博	大杉　祐司	伊藤　文夫	空
8	矢島　寛三	海	園部　宏明	越野　秀人	白川　　新	大野　紀雄	海
9	竹河内　捷次	空	小島　捷利	江本　泉	日高　久萬男	吉橋　誠	陸
10	嶋野　隆夫	陸	嶋野　隆夫	坂東　勝昭	幸治　昌秀	嶋野　隆夫	陸
11	石川　亨	海	洞澤　佳廣	竹村　訓	赤羽　益三	阿保　文敏	陸
12	藤田　昭治	陸	諏訪　浩	藤田　泰夫	橋本　康夫	藤本　四郎	陸
13	山下　輝男	陸	篠田　芳明	新宮領　篁	花岡　芳孝	菅原　純	陸
14	稲葉　憲一	空	寄田　修	斎藤　隆	稲葉　憲一	有井　一弘	空
15	林　直人	陸	瓦谷　育夫	平山　為祥	江口　啓三	佐藤　誠喜	陸
16	折木　良一	陸	石川　由喜夫	橘　恒紀	高橋　健才	石川　由喜夫	陸
17	廣瀬　誠	陸	廣瀬　誠	赤星　慶治	永田　久雄	石村　澄雄	海
18	火箱　芳文	陸	植木　美知男	岡本　正治	外薗　健一朗	岩切　厚	陸
19	酒井　健	陸	塚田　章	武田　壽一	山川　龍夫	榊枝　宗男	陸
20	佐藤　貞夫	陸	西村　智聡	加藤　耕司	渡邊　至之	今井　恵治	陸
21	河村　克則	海	渡邊　隆	山本　高英	山崎　剛美	荒川　龍一郎	陸
22	宮下　寿広	陸	小渕　信夫	山口　透	福井　正明	宮嵜　泰樹	陸
23	岩本　豊一	陸	岩崎　親裕	福本　出	清藤　勝則	竹谷　修治	陸
24	古賀　久夫	空	武内　誠一	原田　哲郎	古賀　久夫	武内　誠一	陸
25	高鹿　治雄	海	飯塚　稔	徳丸　伸一	吉田　浩介	大瀬戸　功	海
26	堂下　哲郎	海	深津　孔	堂下　哲郎	尾上　定正	高嶋　誠	空
27	小林　茂	陸	小林　茂	副島　尚志	丸茂　吉成	小林　茂	陸
28	田浦　正人	陸	田浦　正人	畠野　俊一	遠目塚　進	田浦　正人	陸
29	馬場　邦夫	陸	中村　浩之	中尾　剛久	長島　純	時藤　和夫	空
30	堀切　光彦	陸	山崎　繁	時久　寛司	竹平　哲也	山崎　繁	陸
31	前田　忠男	陸	神道　佳久	今村　靖弘	後藤　雅人	錦織　孝	陸
32	阿部　睦晴	空	池田　頼昭	梶元　大介	柴田　利明	植村　茂己	空
33	中塚　千陽	空	山根　寿一	齋藤　聡	沖野　克紀	沖野　克紀	空

期	期生会会長		代　議　員			業務幹事	
	氏　名	要員	陸:氏　名	海:氏　名	空:氏　名	氏　名	要員
34	佐藤　信知	空	大谷　勝司	大西　哲	小笠原　卓人	小笠原　卓人	空
35	稲月　秀正	空	戒田　重雄	伍賀　祥裕	吉村　一彦	熊谷　三郎	空
36	寺崎　隆行	空	松永　浩二	石巻　義康	寺崎　隆行	松永　浩二	陸
37	宇佐美　和好	空	小川　隆宏	浦口　薫	宇佐美　和好	宇佐美　和好	空
38	石井　浩之	空	森本　康介	濱崎　真吾	霜田　豊英	山崎　武志	空
39	湯下　兼太郎	陸	湯下　兼太郎	平田　利幸	中川　一	湯下　兼太郎	陸
40	清水　徹	海	梨木　信吾	川野　邦彦	石引　大吾	兵庫　剛	陸
41	堤田　和幸	海	小林　貴	堤田　和幸	中谷　大輔	堤田　和幸	海
42	武田　和克	陸	武田　和克	中尾　喜洋	山口　嘉大	武田　和克	陸
43	鎌田　淳	空	澤　繁実	戸永　竜太	志津　雅啓	岩切　主税	空
44	髙橋 秀典	海	青木　仁	阿部　直樹	原田　理	阿部　直樹	海
45	青山　佳史	陸	庄司　秀明	岡澤　智和	坂田　靖弘	庄司　秀明	陸
46	田村　弘範	海	石岡　直樹	近藤　太郎	寺林　洋平	近藤　太郎	海
47	吉水　憲太郎	陸	清田　裕幸	笠原　健治	中里　悠花	清田　裕幸	陸
48	和田　嵩一	海	桐谷　高弘	柏木　祐一郎	齋藤　真吾	柏木　祐一郎	海
49	山上　剛史	空	納谷　知希	小沼　洋祐	山上　剛史	山上　剛史	空
50	吉井　拓也	陸	益田　一宇	八木　佑己	阿部　竹浩	益田　一宇	陸
51	鬼塚　勇	陸	鬼塚　勇	林　大佑	森嶋　倫	鬼塚　勇	陸
52	成田　優	陸	成田　優	小谷　経三郎	荒木　敬	成田　優	陸
53	濵田　卓	空	江嶋　宏次	金澤　佳也	来栖　克則	濵田　卓	空
54	金澤　慧人	空	角丸 公康	垣内 隼斗	内藤 昌孝	金澤　慧人	空
55	若月　豪	陸	若月　豪	中村　知哉	加治　政樹	若月　豪	陸
56	松尾　聡一郎	陸	松尾　聡一郎	田中　結貴	舟津　貴正	松尾　聡一郎	陸
57	我妻　国明	陸	久保　翔平	柗村　駿明	大藪　秀斗	我妻　国明	陸
58	川合　真	海	秋島　一弥	浦山　修太朗	河野　健	川合　真	海
59	屋代　昌也	陸	渡邊　一生	馬渡　淳司	宮川　啓一	屋代　昌也	陸

平成２８年度同窓会本部・支部役員名簿

本部役員

職名	氏名	期別	要員別	記事
会長	折木 良一	16	陸	
副会長	火箱 芳文	18	陸	
	杉本 正彦	18	海	
	外薗 健一朗	18	空	
	河野 克俊	21	海	現職：統合幕僚長
理事	山本 洋	21	陸	事務局長
	槇原 伸一	20	海	
	石野 次男	22	空	
	香月 智	23	陸	防大教授
	田中 敏明	23	陸	事務局長補佐
	廣恵 次郎	33	陸	統幕指揮通信システム部長 {総務部長代理}
	大塚 裕治	32	陸	陸幕監理部長
	中尾 剛久	29	海	海幕総務部長
	金古 真一	30	空	空幕総務部長
会計監事	塚田 章	19	陸	
	鎌田 正広	21	陸	
	宮崎 行隆	20	海	
	戸田 友敬	20	空	

本部事務局員

職名			氏名	期	要員
事務局長			山本　洋	21	陸
事務局長補佐			田中敏明	23	陸
総務	部長		本庄俊弘	24	陸
	補佐		川上幸則	25	陸
			山田勝規	25	海
	担当	総務	増田潤一	26	陸
		新規事業	山本克也	26	海
	（事務局管理）		坂尾陽子		
人事	部長		原田哲郎	24	海
	補佐		内山哲也	25	海
			平川善人	25	空
	担当		石丸安蔵	26	海
			篠田充哉	26	空
経理	部長		深山元延	24	陸
	補佐		大倉育信	25	空
	担当		池畠暢也	26	空
事業	部長		木村　孝	24	空
	補佐	ＨＣＤ/ＨＶＤ	山下繁生	25	陸
		囲碁/留学生	籠谷貴年	25	海
		テニス/助成	杉本　務	25	陸
		ゴルフ/講演	吉岡俊一	25	海
	担当	ＨＣＤ/ＨＶＤ	荒関和人	26	陸
		囲碁/留学生	小松栄登	26	陸
		テニス/助成	伊藤正顕	26	海
		ゴルフ/講演	中村雅樹	26	海
広報	部長		新居久佳	24	陸
	補佐	人材バンク	堀井克哉	25	陸
		機関誌	前田光弘	25	陸
		ＨＰ	坂本卓巳	25	空
	担当		住谷正仁	26	陸
			佐藤　修	26	陸
			井田竜夫	26	空
	技術指導		村田和美	17	陸

小原台事務局員

職名	氏名	期別	要員別
事務局長	影浦　誠樹	33	空
事務局長補佐	橋本　里緒	35	空
	高山　博光	31	陸
	内田　貴司	28	空
	宮本　美緒	48W	空
事務局員	中澤　信一	28	海
	茂泉　勝	30	海
	関口　高史	32	陸
	吉野　順也	33	陸
	甘中　晴彦	33	海
	白幡　和也	39	空
	中野　昌英	41	陸
	東島　　輝	37	海
	工藤　信弥	45	空

電子版「小原台だより」の発刊にあたり

平成２８年度機関誌「小原台だより」は、ホームページにご投稿頂きました方々及び取材に応じて頂きました方々のお蔭をもちまして無事発行する事が出来ました。

この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

ホームページのアーカイブとしての記録保存の意義を重視した電子版として装いも新たに編纂、発行を開始した電子版「小原台だより」も今回の第２４号で第２号となりました。

前号の電子版「小原台だより」第２３号では総ページ数が３００ページを超えたためにダウンロード等の負荷が大きく、また、印刷・検索にも苦労しましたことから、第２４号はスリム化を図るために、ホームページ記載の記事の中から同窓会としての年度の活動を取捨選択して編纂しましたことにご理解を賜りたくお願い申し上げます。

（防衛大学校同窓会本部事務局長　記）